お人よしな吸血鬼

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人よしな吸血鬼

【Ｎコード】

Ｎ７５８２Ｕ

【作者名】

雨月

【あらすじ】

ＮＫＫ（日本吸血鬼協会）から派遣された吸血鬼、彼の名前は大仁義人である。義人は羽津町を恐怖のずんどこに陥れている吸血鬼を捕縛するのが彼の任務である。

第一話

第一話

日本吸血鬼協会。略してＮＫＫ……惜しい、実に惜しい。Ｎと最後のＫの間がエッチ…いや、エイチだったら何となくよかったんだけどな。

ともかく、俺はこのＮＫＫに呼び出された。なぜか、それは俺が吸血鬼だからである。残念ながら、横文字のかっこいい名前ではない。

大仁義人、すっごく日本人臭い名前だろう。

「親父、今日から高校二年生なんだぜ…早速サボりってちょっと気が引けるだろ」

「…吸血鬼の事情だ。まず、親父ではなくパパと呼べ、パパと。親父なんて昭和レベルの呼び方だろう」

親父の名前は大仁正弘……外国行ったときは無理してマーロ四世とか名乗っているそうだ……ドラキュラにあこがれているそうで自宅（日本家屋ね）でもマント着用、風呂上がりはバスローブと言うちぐはぐ感いっぱいの事をやっている。顔立ちもほっそりとしておらず、縄文系の四角い顔である。

「それで親父、わざわざ此処に呼び出したのはどういった理由だよ」

ＮＫＫの理事をしている俺の親父。昼間に行動している事は少なく、人が寝静まった時に行動している為、近所の人たちからは無職と思われている。さらには妻の保険金で生活していると勘違いまでされているという可哀想な親父である。

「実は羽津町というところで吸血鬼関連の事件が起こっているそう

だ。発見次第拘束し、協会に登録させるか消滅させろ」
親父、そして大体の日本人吸血鬼が所属しているＮＫＫ。これは日本籍の吸血鬼が作りだしたものだそうで、日本の吸血鬼の管理、貧血対策、健康管理、他様々な事を取り仕切っている。
もちろん、これら協会は勝手にやっている為に知らないと言う吸血鬼もたまにはいる。そういう場合は極力協会に入るように促すわけだ。まぁ、残念ながら好き放題人間の血を飲んでいるアホな吸血鬼には制裁が下される。青空駐車している人だってずっと放置されているわけじゃないからな……警察に電話してやったことも何回かあるけど、放置している奴が悪い。
「俺を派遣するってことだろ」
「そうだ」
「自分で言うのも何だけど俺、弱いぜ」
人間に比べると強い、しかし、相手が吸血鬼だったらそこまで強いと言うわけではない。
「パパがお前の歳の頃には一匹狼で教会の討伐部隊を返り討ちにしていたぞ」
誇らしげにそういう俺の親父、年齢不詳。見た目は四十後半ぐらいだ。
「あの頃は幕府が荒れていて大変だったな」
「……」
いつの幕府だよ。
「ともかく、お前は平和すぎる世の中に生まれてきてしまったんだ。パパもお前には平和に暮らしてもらいたいと思ってる」
「じゃあこのまま生活させてくれよ」
「しかしな、世の中にはやりたくないからやらないとか通じない事があるんだぞ。これもその一つ。お前は吸血鬼としてルールを破る仲間を戒めなければならない。腕っ節でなくてもいい、説得してくれるだけでもいいのだ」
正論である。悪い事をした者は更生の余地があるのなら更生させ、

出来ないならお仕置きが必要と言う事なのだろう。俺も一度冤罪で吸血鬼どもにふるぼっこの刑を受けたものだ…。
「でも、俺、転校するってことだろ」
「そうだ」
「転校したことないから不安だ」
「何、心配するな。一人暮らしがしたいとか言っていたからちゃんとアパートを借りてやったぞ。本当は古城がよかったんだろうが…」
「いや、日本に古城はないと思う」
あったとしても親父が想像しているような西洋のものではなく、もののふ達が集う天守閣的なものに違いない。
「ともかくだ、明日には現地入りをしてもらう。一カ月に一人襲う程度でいいのに一週間二人のペースで襲われている。中には血が足りなくなって輸血までしてもらった人が出たそうだ」
「…わかったよ、行くよ。行けばいいんだろう」
「そうだ、それでいい」
机の中から茶封筒が取り出される。
「何だこれ」
「協会からの正当な報酬だ。危険度低と言えど、相手は吸血鬼。襲われる可能性もある危険な仕事だ」
「でも、就職している人とかじゃないともらえないとか言ってなかったか」
「ああ、そうだな。普通はもらえないが特別だ」
俺は差し出された茶封筒を手に取り中身が気になった。
「開けても構わんぞ」
「……」
茶封筒の中身を確認すると図書券がたくさん詰まっていた。
「小学生、中学生、高校生、そして、大学生に大学院生。自分で勉強するために本が欲しくなる時もあるだろう、高校生と言う事でさすがに現金はやめさせてもらった」
書類の入ったバインダー付きのファイル、カメラ等もついでに手

渡された。
「今日中にお世話になった人に挨拶をしておくように」
「わかったよ」
こっちでお世話になった人なんてそれこそ小学生の頃の担任や中学の担任、色々といる。それに友達にも挨拶しておかないといけないのに今日中で間に合うんだろうか。
「ん、あれ、親父…現地入りって今日の日付になってるぞ」
現地入りスケジュールには今日の日付がしっかりと刻まれていた。
「お、そうか……じゃあ悪いな、今すぐ行ってくれ。飛んでいくなら気付かれずに飛んで行けよ。あと、日焼け止めとサングラスを忘れるな。現地についたら報告を忘れるなよ」
「……」
こうして俺は見ず知らずの土地に送り込まれたのであった。

第一話（後書き）

不定期連載です。思いついた時に投稿していくと思います。質問、意見等あればメッセージ等でお願いします。

第二話

第二話

自分が空を飛べる事に気が付いたのは何歳の頃だっただろう。物心ついた時には飛んでいたし、小さい頃から空を飛んでいた俺の事を周りは空を飛ぶ事を『ちょっとした特技』としか見ていなかった。小学一年生の頃、何かで見た『面接の受け答え』と言う映像は今でもいい記憶だ。

「大仁さんの特技に『空を飛ぶ事』とありますが、どういうことでしょうか」

「飛ぶんです」

「ほぉ、それはそれは…」

そんなアホらしい妄想……飛ぶ事は気持ちよかった。たまに友人とかを背中に乗せて飛んでいたぐらいだからよほど飛ぶ事が好きだったんだろうな。

それがある日、別に隠れて飛んでいたわけではないが飛んでいた事がばれて相当怒られた。当時の俺は納得いかなかったから親父に何故、飛んではいけないのか尋ねた。

「それは……お前が空を飛んだら飛行機に頭をぶつけて死んでしまうかもしれないからだ」

本当は俺が空を飛ぶ事が希少種であるバンパイアハンターに知れたら大変だと思ってとっさに嘘をついたんだろう。

ただまぁ、俺はバカだった。その言葉を信じ、周りの友達にも急に飛べなくなったと言って色々と嘘をついた。当然、映像なんかに残っていたりする、するのだが……そちらの処分は親父がやってくれたおかげで人々の記憶の中にしか残っていない。

空を飛びながらめっきり電柱の減った下を眺めつつ、俺は人通りのない道へと降り立った。

想像していたよりもちょっと田舎っぽい町の入口に降り立って俺

は携帯電話を取り出した。県道沿いからたまに垣間見る事の出来る田んぼが田舎っぽさを引き立ててくれている。
「現代は携帯電話が普及してるけど未来じゃ何になってるんだろうな」
テレパシーだろうか。それだったら人類皆エスパーである。エスパーと吸血鬼って絶対にエスパーの方がすごいと思うなぁ……自分があほな事をまた考えていた事にため息をつき、俺はちゃっちゃと携帯電話を耳にあてた。
何度かのコール音の後、親父の威厳たっぷりな声が聞こえてくる。
『義人、ついたのか』
「ついた、これからどうすりゃいいんだよ」
『リバーサイド満開というアパートに行ってくれ』
嫌な名前である。なんだよ、満開って。
「そこが俺の住居になるのかよ」
『ああ、ちゃんと連絡入れたから管理人さんがまってくれているぞ。若い人だからといって鼻の下を伸ばさないように。幸運を祈る。これからの事はお前の独断で動いて構わない…気をつけろよ』
「……」
電話は切れ、俺の不安が少し膨らんだ。最後の気をつけろ、と言う言葉に不安を覚えたわけじゃない。
親父は年齢不詳だ。これがどういう事か、親父にとって今の人たちは当然、全ての人間が若い。

若いお姉ちゃんを呼んでやった。

そういって俺のところにある日やってきたのは齢八十を超えるおばあさんだった。

すっごく若い女の子を呼んでやった。

そういって俺のところにやってきたのは四十を超えたおばはんだった。人間、長い間生きるもんじゃないなと俺は思い知らされたね、うん。年齢不詳って親父が数えるのを放棄したからそうなっただけだ。

ともかく、俺が今からすることはＮＫＫに所属している吸血鬼の仕事である。仕事は仕事と割り切ってやるのが一番だ、私情は挟むなと俺の親父が言っていた。

「ＮＫＫ理事の命令だ、義人、今晩のおかずはから揚げにしておけ」

「ＮＫＫ理事の命令だ。刃向かうんなら首だぞ。お前がこの前買ったアイドルの真白りっこちゃんの本をよこしなさい」

絶対に職権乱用だ。

親父にどうやって仕返ししてやろうかと考えながら歩いていると、意外と早くにリバーサイド満開なる怪しい名前の看板を見つける事が出来た。リバーサイド満開の入り口前のアスファルトの道路に立っていたのは当然ながらおばあさん。

「ああ、お前さんが正弘さんの息子さんかぁ」

「はは、そうです」

誰も正弘なんて名前の吸血鬼がいるとは思うまい。

「何でも、見た目はそんなに若いのに百歳は超えているとか何とか……正弘さんに聞いたよ」

「え」

たまに、いや、結構な頻度で親父は嘘をつく。人を傷つけない嘘ならいいだろう……人を混乱させる嘘は駄目だ。残念ながら俺はこの世に生を受けて今年で十七年目ぐらいだ。見た目が若くて実は年齢すごいことになってますよとかあり得ない。

「えーと、まぁ、そうなんですけど…俺の場合はずっと棺に籠って

闇に潜んでいましたから。世間には疎いんです」
親父がＮＫＫの理事になってから一つ決めごとが増えた。

『一つ、吸血鬼のイメージを壊さない事』

風呂上がりに麦茶を飲み干すとか絶対に言っては駄目らしい。バスローブをまとい、クールにワイングラスで血を飲み干すと言わないといけないそうだ。
「なるほど、世間知らずのお坊ちゃんということだね」
「まぁ、そんなところですよ」
納得してもらえたようでよかった。親父が手配してくれた住みかだろうから当然知り合いのようである。親父についての話なんて聞きたくないのでさっさと部屋の方に案内してもらうことにした。
「此処が義人君、いや、義人さんか」
「大仁でいいですよ」
「そうかい、じゃあ大仁さんの部屋だよ」
一階の角部屋。泥棒に狙われないかなとちょっと不安だ。
「部屋はきれいに使っておくれよ。もし使ってくれなかったらニンニクと十字架を持って襲いに行くからね」
「それは怖いですね、きっちり綺麗に使います」
親父はニンニクと十字架を異常に怖がる……ふりをしている。ニンニクなんてちょっとにおうだけだし、十字架は宗教的な話だろうよ。とりあえず、俺には関係ない。苦手なものなんて昆布くらいなものだ。
その後、数十分ほど与太話に付き合わされて解放された頃にはお昼が過ぎていた。

第三話

第三話

吸血鬼は日光に弱い。何故苦手なのかは吸血である俺でさえ知らん。

吸血鬼の医者か科学者に言わせると、血中に特殊な成分か何かがあるそうだ。それが日に当たると吸血鬼の身体にとって有害な何かになって許容範囲を超えると花坂爺さんに出てくるようなポチを燃やした後のような灰燼に帰すに違いないらしい。これ以上詳しい事は知らん、人間だってそうだろうよ。自分の体のことなんてほとんど知らないだろうし、専門家がいないと詳しいことだってわからないはずだ。

吸血鬼の中にも学者肌と言う人がいたそうで、日焼け止めを作る会社を設立。日夜研究を重ね、俺らにとってその人が作った日焼け止めは必需品となった。

もちろん、犠牲の上に成功なんて存在しなかったそうで肌が永久的に鳥肌になってしまった吸血鬼や全身の毛が常に逆立ってしまった吸血鬼……他にも色々とやばい事になった吸血鬼がいたらしい。

ともかく、犠牲となった吸血鬼の人たちのおかげで俺はこうやって日の下で活動できるのだ。科学って素晴らしいね、うん。俺、理科とか嫌いだけどな。

前置きはこのぐらいにしておこう。今日やるべきことはこの町の被害者の数を改めて調べる事と、吸血鬼と思しき人物が日中も活動できるかどうかである。日焼け止めは当然ながら協会に所属している吸血鬼だけしか入手できない限定品なのだ。

「図書館だな、うん」

地方紙とかを調べるなら図書館だろう。と言う事で、俺は図書館に向かったわけだ……途中、警察に聞いたりしてなんとかたどりついた場所は高校だったりする。警察で直接事件の事を聞けばいいじ

ゃんかと思うかもしれない。いやー、ね、吸血鬼ってそういうのは苦手だったりするんだよ。
この町の図書館は高校の敷地内に作られていたそうで校舎とは別に地上二階、地下三階に及ぶ巨大図書館だそうだ。
本好きにはたまらない場所だろうな。
中に入り、新聞の置かれている場所へと移動する。とりあえず学ランを着ている為に周囲の生徒に怪しまれてはいない……いや、どうやらこの高校の制服はブレザーのようだな。ちょっとだけ注目を受けてしまった。
「はっ、いかんいかん…女の子にちょっと注目されたぐらいでぼーっとしちゃ駄目だ」
俺の事を見ている女子生徒の中に吸血鬼がいるとも限らない。調査するときは目立たないようにと誰かに教わった気がする。
新聞記事を持っていたメモ帳にまとめていく。
「……最初の被害者が襲われたのは半年前か。親父の奴、結構放置してたんだな……まぁ、すぐに断定できないか。一週間に大体二人襲われてるって結構な頻度だな……」
被害者はすべて女性。しかも、十六歳から二十歳前の若い女性だけのようだな……襲われそうになったけど助かった女性は若づくりをしていてぎり二十代…吸血鬼も騙されたようだし…それで襲われている時間帯は午後六時以降だな。
つまり、相手は協会にやっぱり所属しておらず、日中は襲えないってことだ。
「うーん…後は抜き取られる血の量が多くなっているってことか」
とりすぎは体に毒である。お酒とか薬とか…あとは何があるっけ…別にいいか。とりあえず、血を飲みすぎた吸血鬼はさらに血を欲するようになり最終的には自分を制御できなくなる。こうなると大変でそれが太陽さんさん降り注ぐ日中でも関係なくあほみたいに出て行く。
そうなったらどうなるか……苦しみながら血を求め、一滴でも血

を飲めばその瞬間にお日様に焼かれて灰になるそうだ。なんでそうなるのかはいまだに解明されていないそうで、吸血鬼の数少ない学者たちが頭を抱えている。
吸血鬼御用達の日焼け止めを塗って拘束していた吸血鬼が逃亡、結果はやはり消滅したそうだ。どうも化学反応が起こっているみたいだねぇとこの前話を聞いた。
ともかく、あまり人に迷惑をかけるのはよくないのと一応吸血鬼仲間である為、事件を起こしている吸血鬼と会って話をしなくてはいけないだろう。まぁ、話を聞いてくれない相手なら実力行使をするしかない……腕っ節には自信が無いのですぐさま逃げて救援を親父に頼む事になるだろうけどな。
「あら、あなたもしかして大仁義人君じゃないかしら」
「へ」
振り返るとそこには教師っぽい人が立っていた。
「間違っていたらごめんなさいね、で、義人君かしら」
「え、ええ…あの、あなたは」
「私はあなたのクラスの担任なの」
「そう…なんですか」
「ええ、教科書とか持ってきてないようだけどあなたさえよければ今日のホームルームで転校生として紹介するわよ」
四月の転校生ってかなり違和感あるな。絶対何かあっただろって勘ぐられるだろうし……いや、実際何かがあったからこっちに転校してきたんだけどな。家庭の事情じゃなくて吸血鬼の事情ってやつですよ、奥さん。
「明日朝から来ます。今日はちょっと調べ物で図書館に来ただけですから」
「あら、そうなの。勉強好きなのね」
「いや、そうじゃないんですけどね」
先生はふと俺の握っていた新聞を覗きこんで一つの記事に目をやった。

「……羽津吸血鬼事件の事を調べてるのね」
「そうです。ところで先生の名前は…」
「ああ、ごめんね。私の名前は玉宮菜穂子。私も一度だけ吸血鬼に襲われちゃったのよ」
「そうなんですか。詳しく教えてもらえますか」
これはまたラッキーと言うか、結構襲われていると言う事なんだろうな。
「……正確には襲われたっていうか押し倒されて、ちらっと相手は見て逃げて行ったんだけどね。吸血鬼かどうかわからなかったけど、きっとそうに違いないわ」
なるほど、つまり先生は若づくりをしていた二十代後半の被害女性ってことか…。
「ところで、どうして大仁君はそんな記事を調べているのかしら。先生、手伝えることがあるなら手伝うわよ」
「あ、いえ……血が抜き取られるなんて珍しい話を引っ越してきたときに聞いたんです。それでちょっとだけ興味がわいたので調べてみただけですよ」
「そうなの？」
「はい…あ、先生、俺、ちょっと用事ありますから今日はこれで失礼します。また改めて明日来ますんで…」
そういって俺は逃げるという選択肢を選んだ。もちろん、新聞記事はちゃんと戻しておいたから安心して欲しい。ただ、帰る時に先生が図書館の窓から探るような目で俺の事を見ていたのが非常に気になった。

第四話

第四話

ＮＫＫを作った偉い吸血鬼は最初に医者方面の知り合いを募ったと言う話がある。これは怪我をした吸血鬼に処置をしたり、自分で人間から血を取るのが下手な吸血鬼の為に献血で得た血を秘密裏に回すためだと言われている。

昔の吸血鬼は十キロ先の暗闇でも見渡せるとか言われていたものだ…残念ながら、毎年の健康診断の結果最近五キロが限界になって来たそうである。人間と共に（あくまで紛れ込んでだが）生きて来た吸血鬼も機械に頼ったりしてきている為、身体能力が以前に比べて落ちて来たらしい。

まぁ、落ちたと言ってもそれなりに腕力は強いし、空だって飛べるからまだまだ十分な力を持っていると俺は思っている。重武装した人間相手にしても俺だって勝てるからな。

図書館を出て俺は文字通り飛んで家に帰った。他の人に見られないよう気を付けているし、時間帯も人が少ない昼下がりだったのであっという間に家へと帰り着いた。

「ふぅ…」

あの先生が何者か調べたい…うん、普通に綺麗だったし俺だったら襲って血を吸っていたかもしれない。ただ、ここの吸血鬼は相当なグルメらしい。普通だったら好みじゃなかったとしてもそのまま襲っていたはずだし、血を吸った相手の記憶をちょっとだけ消したりする事が出来るのだ。

人はそれを特殊能力と言う。

この力は多用すると自身の寿命をすり減らしてしまうそうで現代の吸血鬼は薬で回数を制限していたりする。俺みたいな若い吸血鬼はあまり制限されていないが、老齢となると回数制限の薬が欠かせなくなってくるらしい。

これは男の吸血鬼に多いらしい……まぁ、その、同族で恥ずかしいと言うか何と言うか、自分の嫁さんに満足いかないオオカミさんがお酒の席とかで多用して過ちをしちゃった時の為に催眠術を使うそうだ。

ついでに、吸血鬼同士では子供は生まれないそうだ。片方が人間なら出来るそうで、これもまた理由がわかっていない。半分だけ人間、半分だけ吸血鬼と言ったそんな半端な存在は生まれず、一人目の赤ん坊は必ず吸血鬼として生を受ける。二人目以降は人間が生まれるそうだ。これは吸血鬼の数が人間を絶対に超えないようになっている仕組みだとか何とかで、詳しい事は学者にでも聞いてほしい。それで日本の吸血鬼同士の結婚はそう多くない。男がよく浮気をするからだそうで、喧嘩をするとどちらかが土の下に行くそうである……九割、男の吸血鬼が天国に召されるそうな。

ともかく、わかる事は浮気をするのはよくないと言う事だ。俺の親父はもう六回ぐらい死んだ母さんに刺されたそうだ。

「後にも先にも、この私をあそこまで追い詰める事が出来たのはお前のママだけだったよ」

何故か誇らしげにそういう親父。月命日には必ず墓参りに行くぐらいだからよほど死んだ母ちゃんにぞっこんだったようだな。写真や映像なんかに母ちゃんは残っていないので、話でしか知る事が出来ない。親父の話によると俺の母ちゃんは美人で強くて、嫉妬深く、怒ると手がつけられないほど暴れるらしい。お隣のおばさんとちょっと話しただけでも駄目、ウェイトレスに注文するときも母ちゃんがしていたそうだ。

写真の一枚でもあるものかと思って探してみた事もあった。親父が持ち歩いているわけでもなく、俺が生まれてすぐの火事で家が燃

え、アルバムとかも焼失したそうだ。
「いいか、義人。美人の奥さんをもらうんだぞ。不細工は三日で慣れるとか言っている奴は悔しくてそんなことを言っているだけだ。一度しかない吸血鬼としての命、全うしろよ」
親父から一度だけ言われた言葉である。中学一年生の頃にその言葉を信じて可愛い子にアタックした事もあったんだけどな。
「ごめん、大仁君はいい人だけどそんな風には見れないの」
「え、ちょ、色白で頼りなさそうだから無理」
「義人君にはもっといい女の人がいるわ」
俺の場合、選ぶ権利は男じゃなくて女にあると思うだよ、親父。高校生になってからは告白なんて一度もしていない……また、可愛い子にあってもいない。初恋は近所のお姉さんだったが、種付け婚…じゃなかった、出来ちゃった結婚で何処かに行ってしまった事が大分トラウマになったな。
「いいか、義人。美人の奥さんなんて怖いだけだぞ。結婚したが最後、釣り合ってないとか色々影でのしられるようになるだけだ。自分の顔を鏡で見て、しっかりと均整取れた相手を選べよ」
親父はころころと意見が変わるからな。最近はこんな事を言っているもんだから困る。これもまた、一度しか言われない言葉なのだろう。
「今日の晩御飯は……出前かインスタントでいいか」
ぶっちゃけ、人間の血を吸えば飯なんて食わなくていい。直接首筋に噛みついて…と言う方法はあるにはある。しかし、これは相手に快楽を与えたりするために恋人同士でやってくれとのお達しだ。普段は相手を催眠術で眠らせて血を抜き取り、いただくと言う方法にしている。
「ともかく、暗くなっても夜道を歩いているうら若き美女の血でもいただこうかねぇ」
ついでにこの町の女性を恐怖のどん底に落としこんでいる吸血鬼を見つける事が出来るかもしれないからな。

第五話

第五話

午後七時過ぎ。これからもっと明るくなってくるんだろうな。ともかく、吸血鬼が活動するには少し早いくらいの暗さだ。足元が暗いからと言って札束を燃やす必要性はない。

部活動を終えて生徒たちが帰路についている頃合いだろう。

目当ての女性を見つけたら後は簡単。缶を蹴飛ばすなり、指を鳴らすなりして振り向かせ、速攻で相手の目に術をかければ…はい、終了。煮るなり焼くなり好きにしろという状態になるのだ。

多用すれば自分の体調を著しく悪くするし、下手すると協会に目を付けられる。大人しく此処は血を抜き取ってから飲んだほうがいいだろう。直接血を飲むとたまに変な人間に追いかけられちまうからな。

「お、いたいた」

俺が通う事になる高校の制服を着ている女子を上空から発見する。このまま急降下して襲っちゃってもいいが万一と言う事もあるだろうから背後から行かせてもらうかな。

近くの路地裏に降り、相手が一瞬のすきを見せる場所…たとえば、家の前や暗い道を抜けた街灯間近で狙えば一発である。

しかし、考えてみればこの町の女性を襲っている吸血鬼はそのまま襲っているんだよなぁ。協会の存在を知っていればばれるのが怖くて力を毎回使うだろうし、血を飲めばその分回復もするもんだ。知らないなら使わない、というわけでもない。町で一人だけ襲うのと、その場所にとどまって毎週人を襲うのでは話が違う。警戒されるからだ。

中には鍵を開けて部屋に忍び込んで寝込みを襲うなんてのもある……しかし、ここの犯人はそれを一度もしてないから何かしらのポリシーでもあるんだろう。もしかしたらＮＫＫの事を知らないだけ

かもしれないな、だってローカルな組織だから。
人のおまんまの心配をしている場合ではなかったな。うん、放っておいたらそろそろ大きな道に合流しそうだ。
俺が部活帰りと思われる女子生徒に襲いかかろうとしたその時、別の何かがその女性を背後から襲っている真っ最中だった。
「何……」
「むーっ……」
口をふさがれ、身体を動かしている少女はあまりにも無力すぎた。黒いマントで姿を隠し、ちらりと見えた顔、吸血鬼が血を吸うときにだけ見せる深紅の瞳、そして口元には鋭い牙が二本……月明かりに照らされている。

こいつは吸血鬼に間違いないっ。

俺はさっさとこんな仕事を終わらせたかったので嬉々としてその吸血鬼に殴りかかった。一応、両刃の剣とか家にある。そんなもの持って血を飲みに行くバカはいない。
人間だったら絶対に反応できないスピードで殴りかかった。相手はすぐさま反応してあろうことか掴んでいた女の子を宙に思い切り放り投げたのだ。
ぽーんとお月さまに女子生徒が照らされたのも一瞬。すさまじい悲鳴が聞こえてきたために俺はその子を助ける為に飛んだ。どの道、女子生徒に気を取られている間に相手は逃げてしまったので助けるしかないだろう。見捨ててアスファルトが血に染まるのは気分が悪い。
「よっ……っと」
「きゃあぁぁあ？」
近くの民家の屋根に降り立ち、そのままアスファルトの道へと降

り立った。まー、空を飛んだの見られたりはしていないだろう。空に放り投げられて何かを見る暇なんてなかったはずだしなぁ……。
「ん、どうしたの」
俺の事を熱心に見てくる。
「今、空飛んだよねっ」
いやー、あはは……見る暇ある人はあるんだな。吸血鬼の特殊能力的な何かで記憶を操作しようか悩んだ……ただ、これを使うと前後数分の記憶が飛ぶ。眠らせたり、気絶させたりは結構長い時間できるけど記憶は残っているからな。選んで消せると言うわけじゃあない。
大体、記憶操作なんてしたらさっきの事まで忘れちゃうだろうし、もしかしたら犯人の顔を覚えているかもしれないからな。
「詳しい事は明日、この時間この場所で話す」
「あ、待ってよーっ」
一番厄介な性格の人間に目を付けられたんじゃないかと思った。
あの時、記憶を消しておけばよかったと思ったのは次の日の事であった。

第五話（後書き）

最終的に３０話ぐらいでけりをつけたいと思っています。１０話まではサブタイもなしですが、それ以降は二つに分けて話を進行させる予定です。

第六話

第六話

転校生がやってくる、しかも四月にやってくるとか狂気の沙汰としか思えない云々……ともかく、一歩遅れての友達百人できるかなー。高校二年生だから中途半端に友達で来ているだろうし、俺、大丈夫なんだろうか。

「転校生の大仁義人君です。みなさん拍手」

何故、拍手なんだろうかと思っている人なんて誰もいないだろう。朝からぼけーっと……いや、一名必死に叩いたりする人もいるけどさ。

「どうも、大仁義人です」

転校生がやってきたのにクラスは別の話で盛り上がっていた。ひそひそと話されている事を聞こうと思えばすぐに聞ける。

「こんな時期に転校生って珍しいよねぇ」

「うん、何かの調査員だったりするかも」

「あはは、それはないよ」

そんなひそひそ話。彼女たちが真実を知ったらどんな顔をするんだろうな。

「じゃあ大仁君はあの席に座ってね。一番後ろの席だからってサボらないで授業は真面目に聞くように」

「わかってます」

昨日助けた少女が隣の席になるなんて所詮、小説の話である。隣の席はカメラを丁寧に拭いている男子生徒だ。

「やっぱり転校生だったんだねー。上級生かなって思ったけど同い年なんだ。あ、留年していたりして年上だったらごめんね」

「いや、同い年だ」

いや、前の席にいた。さっき拍手を一生懸命していた生徒だ。

「あ、名前はねー、青木千華。青木とか千華ちゃんとかそんな呼び

方でいいよ」
「……え、あ、ああ…」
「詳しい事は休憩時間に教えたり聞いたりするからっ」
好奇心の塊は吸血鬼にとって害でしかない。根掘り葉掘り聞かれたり、中には色々と試そうとしたり……吸血鬼の中にも他人の身体をいじくったりするのが大好きな人たちもいるけどな。ともかく、面倒な事にならないように祈るばかりだ。
どうせ休憩時間になれば俺の周りに人がやってきて色々と話さねばならないのだろう。ちょっとぐらい嘘とかついてもどうせ知り合いは居ないんだからいいよなぁ。

休み時間、俺の考えは見事に当たった。
「吸血鬼に襲われたんでしょ」
「大丈夫だったんだよね」
「よく助かったよなー、青木さん」
「まーね。私が襲われた時にさっそうと現れて助けてくれたすっごくかっこいいヒーローがいたんだよっ。まだ現代日本も捨てたものじゃないねっ」
ちらっと俺の方を見てウィンクをしてくる。どう返せばいいのかわからない……というか、転校生よりやっぱり事件の被害者の方に興味があるんだな。
ちょっとだけがっかり来て教科書を引っ張っていると隣の男子生徒から声をかけられた。
「転校生、このおれが質問してやるぜ」
「……は」
「おれの名前は緑川小次郎だ。趣味はオカルト全般…今はこの界隈を恐怖のずんどこに陥れている吸血鬼に興味を持ってる」
「恐怖のずんどこって…」

「昨日、偶然おれはお前の前の席に陣取っている青木千華が何者かに襲われているところを目撃した」
「……」
こりゃまた厄介そうな奴に目を付けられたものだ。
「当然、俺は上空に放り投げられた青木千華なんぞに目などくれてやらず、襲った犯人の方へとシャッターを切ろうとした。しかし、奴は人間業とは思えない素早さで俺の視界から逃げて行き、追いかけても遅かった」
「そうか」
「ああ、そうだ。おいかけられないと踏んだ俺はせめて上空に放り投げられた青木千華がどうなったかだけを写真に収めようとした。なんと、転校してきた大仁義人が既に青木千華と話しているではないか……人助けもできなかった俺は肩をがっくりと落とし、家に帰った」
「……それからどうしたよ」
「どうしたって……これで終わりだ」
こいつは何かを俺に伝えようとしているのかと思った。幸か不幸か単なるアホらしい。どうも見当外れの的外れだったようだ。
「へぇー、転校生君に助けてもらったんだー」
「運命の出会いってやつかも」
そんな話をしている女子連中にため息をついて俺はウィンクをまたしてきた青木千華とやらに手をふってやった。ショートカットがお似合いの女子生徒が早速知り合いになるなんて俺は運がいいかもしれない。
次の授業、俺は先生から借りた教科書を眺めながらノートを取る。現代社会の先生は年老いており、時折何かを思い出すかのように動かなくなる事がある。ちょっと不安だ。
先生が本日三度目のぼーっとした瞬間に前から二つ折りの紙が回されてきた。

「放課後、会議室の前で待ち合わせしよっ」

直接休み時間に言ってくれればいいものを……どの道、この時間が終わればお昼だ。面倒だからその時に話をしてやったほうがいいだろうな。

「せんせー、今日転校してきた大仁義人君が女子からもらった秘密の手紙を見てにやにやしてますー」

突如、緑川次郎が手を上げてそんな事を言い始めた。思考停止していた老人は動きだして俺をじっと見つめるとにやっとした。

「……大仁君か。ふむ、今日だけは多めに見てやろう。清純な年頃じゃろうからなぁ」

「……」

嫌な生徒に嫌な教師だ。

第六話（後書き）

ご意見ご感想、誤字脱字報告等ありましたらお手数をおかけしますが感想、またはメッセージのどちらかでお知らせください。

第七話

第七話

俺が吸血鬼として生きてきた中で一番苦労してきた事。それは人間に吸血鬼と言う存在を説明することだ。説明してきた回数が少ないから苦手なのか、それとも俺自身が説明下手だから苦手なのかは定かではない。

とりあえず、吸血鬼という存在を説明しようとすると先入観を持った人間が多い。その為、その人のイメージを壊さないような説明の仕方をしなくてはいけないのだ。まぁ、面倒だから吸血鬼の組織と言うものがあって、悪い吸血鬼を捕まえたりすると説明するのが大半である。

今回のケースでは何不自由なく、相手に説明する事が出来た。勘違いのおかげだろうな。会議室前に呼び出され、その後は体育館裏へと移動した。

「なるほど、義人君は正義の吸血鬼の組織に所属していて悪さをする吸血鬼を懲らしめる為にこの学校に潜入しに来たってわけなんだねっ」

「いや、そうじゃなくて…」

今回ばかりはしっかりと説明しようとわかりやすいようにまとめてみたり、ＮＫＫの会誌を読ませてみたり、一人二役の劇でやってもみせた。

残念ながら俺の努力は無駄に終わり、相手は勝手な解釈の元で吸血鬼と言う存在を認めたらしい。

「うんうん、言わなくたってわかるよ。吸血鬼って言ったら絶対にダークヒーローでクールなイメージがあるもん。義人君が見た目クールじゃなくてあんまりかっこいい顔じゃないとしても、あたしの事を助けてくれるそれなりにいい人って言うのはよくわかったよ」

「それなりって……」

的外れ、ではない為に難しい。俺の事をとりあえず危険人物ではないと思ってくれているようだし、自ら協力してくれると言ってくれたのだ。これでよしとしよう。
「協力って何すればいいのかなぁ。あ、やっぱりあれだね。義人君にあたしの血を飲ませてあげればいいんでしょっ」
「いや、別に血はいらないけど」
「え、そーなの？吸血鬼って言うぐらいだから血が欲しいんでしょ？」
「うーん、そんなにがぶがぶ飲んでたら身体に悪いんだよ。腹八分って言葉があるっしょ」
飲料ってわけじゃなくて食料という種類だと思う。顎とかちゃんと使わないと劣ったりするらしいし、前も言った通り血ばかり飲む吸血鬼は極端に日に弱くなって灰燼に帰すのだ。
「ピンチになった時に頼むぜ」
「ふーん、わかった。それで血はどうやって飲むの？」
「色々と方法はあるけどなぁ…まぁ、注射器で血を吸ってパックに保存するとか…」
「あれ？首元にかぷって噛みついたりしないの？」
「たまにやるよ」
一年に一度、あるかないかである。俺の親父はイメージを保つためにやっておけと言う。しかし、まず吸血中は誰にも見られない様にするのが基本だし、うら若き乙女の血が好きな俺としては後が消えるとはいえ首元の牙痕を残したくないと言うのも理由に挙げられる。
「へー、注射器と首元に噛みつくのってどっちが痛いの？」
「注射器、だろうな。歯から人間の脳に快楽を与える成分が放出されるんだよ。大体、本気で噛みつくわけじゃないから痛くはないと思う」
噛みつかれたことなんてないからわからない。中には吸血鬼の血を好む吸血鬼もいるから注意しとかないといつかはやられるかもし

れん。
と、まぁ…こんな風に質問攻めとなって俺の学校一日目昼休みは残り十分程度となった。
「ちょっとトイレ行って来る」
「あ、一階の体育倉庫近くにあるトイレは行かないほうがいいよ」
「ん、なんで？」
「体育館倉庫近くのトイレは暗くてねー、おばけが出るんだって。だから行かないほうがいいよ」
「……わかった」
なるほど、もしかしたら吸血鬼はそのトイレに潜んでその週の獲物を吟味しているかもしれないからな。怪しいと思ったところはしっかりと探してみないといけない。テレビに出てくるあいつの頭が何だかずれているような気がしたり、どう見ても作り話だろとつっ困らざる負えない怖い話だったり色々とあるもんだ。
以前、慌てていて男子トイレと女子トイレを間違えた事がある。うん、あの時は出てくる女性と鉢合わせして本当、やばかった。空を飛べなかったらどうなっていたか……きっと今頃塀の中で首輪をつけられて強制労働をさせられていたに違いない。
俺が哀愁漂うような感じで引き戸をスライドさせると比較的綺麗な男子トイレが見えた。ただ、入った時につんとしたアンモニアの匂いが俺をちょっとだけ不快にさせた。
「おばけねぇ…」
トイレの中にあるもの、見える景色は……水色のタイルに半開きの掃除用具入れ、天井にはクモの巣なんてないし、そして床にはぴくりとも動かない異様に髪の長い女子生徒……。
「え…」
ラッキー、このまま覆いかぶさって血を吸いながら……じゃなくて。
こほん、こういう時こそ冷静になって行動を起こさなくてはいけない。冷静さを失った吸血鬼が慌てて人口呼吸とかやると人間の肺

は破裂すること間違いなしだ。
まずは肩を叩いて意識の有無を確認だな。
「大丈夫ですかー、意識ありますかー」
「……」
駄目だ、反応してくれない。どーも意識ないようだ。
驚くほどの白い肌。その首元に近づいて噛みつこうとしてやめた。
素直に手を置いてみる。すっごく美味しそうな人だけどな。
「うん、一応血は流れているし……呼吸は…してないな」
救急車を呼んだ方がよさそうだ。でも携帯電話鞄の中に入れちゃってるしなぁ。保健室に連れて行ったほうがいいのか……いや、こういう時こそ思いきって行動しないといけないはずだ。
まずは気道の確保。意識のない人が呼吸をしやすくして、シャツのボタンを外して……うわぁ、本当、白くてすべすべしてる肌……心臓はちゃんと動いてるな、よし。
「人工呼吸だな……うん、俺ならやれるっ」
俺は勢いよく（もちろん手加減はしておくから安心して欲しい）息を吸い、うら若き少女の唇に自身の唇を重ねようとしたところで……眠れるトイレの少女のお目目と僕ちゃんのお目目がばっちしぴったんこした。
「うおっ……よかった。意識ありますかー」
「……」
その女子生徒は立ち上がり、何事もなかったかのようにはだけたシャツを元に戻した後すぐに出て行った。
「……なんだったんだ、あれ」
もしかしてあれが青木千華の言っていたおばけ、なのだろうか。おばけにしては温かったし、肌がすべすべしていたし……どう見ても女子生徒だろ。
イレギュラーな存在だった少女は見なかった事にして俺はトイレの調査を行う事にした。調査と言っても特別な機械で何かをするわけではなく、鼻で匂いを嗅ぐだけだ。

吸血鬼が本気を出せば青森県産のリンゴとそれ以外のリンゴを分けることだって出来るんだぜ。他にもお風呂に入っていない人間のどれだけ風呂に入っていないかと言う日数も言いあてられるからすごいのである。

ともかく、吸血鬼が放つ血なまぐさい感じはなかった。

「ここに吸血鬼はいないな」

さっきの女子生徒の匂いぐらいしかしない。うーん、しかし……

…さっきの子、きっと血がおいしいに違いない。

第八話

第八話

吸血鬼にも好みの異性と言うものが存在する。第一条件に血がおいしそう。それ以降は各吸血鬼の趣味によるものが多い。基本親子は好きなタイプが似るとか何とか、昔見せてもらった親父の本に載っていた。

「愛があれば血のうまさまずさは関係ない」

そんなことを親父は言う。まぁ、俺もそう思うけどな。

こっちに引っ越してきて一週間たった放課後。一週間ってあっという間かもしれないけど、放課後は帰宅部の青木千華と共に毎日帰ってヒーロー物を時代別順に見るなどして親交を深めた。そして、カメラを持った緑川小次郎ともそれなりに仲良くなったおかげで素晴らしい一枚をもらう事が出来たのだ。

「おおおっ。お前、これは…」

「いいだろう、生の真白りっこちゃんだ」

そういえば親父に貸したりっこちゃんの写真集が未だに帰って来ない。俺のりっこちゃんは今頃どうしているんだろうか。

「くれ」

「いいぜ」

「おおー、ありがとう、隣人よ……」

写真の中で俺に向かって微笑んでくれているりっこちゃんの表情がいつもに比べて能天気で、バカっぽく見えた。

「って、これは青木千華じゃないかーっ」

「ありゃ、ばれたか」

何故か掃除用具入れから青木千華が出てきた。何でそんなところに入ってるんだよ。

「かつらかぶってポーズも同じにすれば大丈夫だと思ったんだけどな」

「あのなー…」
どこから説明すればいいんだろう。
「青木と違ってりっこちゃんは儚げだけど元気なんだぞ。ひまわりに手足が付いたようなお前さんとは違う」
「えへへ、あたしってひまわりのイメージなんだ！ありがと、義人君っ」
「……はぁ」
嫌みがうまく伝わりません。どうしたらいいんでしょうか、先生。
「でもさ、義人君もこういったアイドルって好きなんだね」
「ん、まぁ、そりゃ……」
一番の理由は血がおいしそうだから……なんて言えないな。今時珍しいじゃないか。数だけ出して好きなの選べとか、あとでばら売りとかそんなアイドルじゃないし。
「ふつーに可愛いからな」
「え、じゃあ…あたしもアイドルになってみようかなー」
「それは無理な注文だ」
「えー、なんで」
「そりゃお前……千華は大きくなったらヒーローになって世界を救わなくちゃいけないだろ」
「あ、そっか」
高校二年生がこんな事を言っていたら駄目だろう。そう言えば…以前いた高校の英語教師が一度だけ地球防衛軍に入りたいんです、どうしたらいいんですかって質問（※実話です）をマジで受けたっていってたっけな。
俺達のボケを見ていた小次郎は立ち上がるとため息をついた。
「そろそろ次の授業に行ったほうがいいだろ」
「そうだな」
「準備準備っと……あれ」
ふと廊下の外を見て動きを止めた千華。何となく俺も廊下の方へと視線を向けるとお化けのような、幽霊のような異様に髪の長い女

子生徒が東から西へと歩いて行った。男子トイレで倒れていた相手だと言う事に気が付く。
「どうした」
「今の人……吸血鬼っぽい」
っぽい……ねぇ。
「今の子は二組、隣のクラスの須黒美咲さんだぜ」
「だぜって……お前なんでそんなアルバム持ってるんだよ」
しかも何気に女子専用（注意：男子は載っておりません）って書かれてるし。
「いや、ほら、おれも将来的には大仁みたいに青木っぽい何かを相棒にしてイエティとかカメラに収めたいんだよ」
「おお、相棒認定出たよっ」
「……」
「事件は会議室で起きてるんじゃない、そこら辺で起きてるんだ！」
机を叩いて憤る千華に俺はため息をついて突っ込んだ。
「いや、そんな事になったら警察足りねぇから……大体、作品間違ってないか」
「あは、そうだっけ？」
相棒はもうちょっと頭脳明晰な人間の方がいいんだけどな。
「ぴったりじゃないか。ボケと突っ込みで」
「将来的には俺の方がボケに回りたいぜ」
「大丈夫だよ、ボケなくてもあたしが突っ込んであげるからっ」
「それじゃ意味ないだろっ」
ふと、視線を感じて廊下の方を見ると長い黒髪がちらっと見えた……気がした。

第九話

第九話

ＮＫＫに所属している吸血鬼は知っていることだ。三カ月に一回は会議が行われてＮＫＫの決まりごとが変更になったりする。決まり事で不利益を被ったものが一名以上いた状態で、冷静に判断された後に決まり事を存続させるか、消滅させるか決まるのである。

基本的に不利益を被るような決まり事を提案するアホは居ない。暑い日は日傘を持ち歩こうとか誰が不利益被るんだろうか。ともかく、俺にとってはどれもくだらないものばかりの気がする。

裁くときも血の事以外は人間達の法律と一緒。罪は裁かれて終わりだ。回避したいときはどうすればいいか……一つの方法として、古城の主とかになればもみ消しとか考えられる。残念ながら庶民的な吸血鬼の方が多い為に出来るとしたら海外への逃亡ぐらいだろう。

逃亡したって九割が捕まる。何せ、人間より鼻がいいし一人を追いかける数が違う。他国の吸血鬼協会とも条約を結んでいるらしく外国で捕まっても送り返してくるからな。その後は逃亡したって事でそれなりの罪がプラスされる。それなりの罪？そりゃ『中年男性の脂ぎった血を飲む事』だ。

ともかく、俺がいいたいことはルールと言うものはどこの世界にも存在しているってわけだ。簡単に言うなら基本、男子は女子トイレに入ってはいけないとかな。

「どうすっかなぁ」

俺が今現在お尻を便器にくっつけている場所は一階女子トイレ。大きいほうがあれだったのであわてて駆け込んだ場所が何を間違ったのか女子トイレなのだ。もちろん、出した後はすぐに出ようと思ったさ。吸血鬼が大きい方を長々とやっているなんてイメージされたくないだろ？

でもな、俺が入った後、女子たちがたくさん入ってきてそこでよう

やく男子トイレではなく女子トイレに入った事と言う事実に気がついたんだよ。
そして今現在にいたるわけだ。
「落ち着け、俺。この絶対的なる警備の中から何とか逃げ出す方法があるはずだ」
赤外線センサーがあるわけでもなし、数々の盗人を捕まえて来たプロがいるわけでもないのだ。大丈夫、ちょっと授業に遅れてしまうがチャイムさえなってしまえば今そこにいる連中も授業に行くに決まっている。今のところは陸の孤島、壁際に追いやられた状態だ。しかし、いずれ活路は開く。
「あ、次は移動教室だったね」
「そうだった、もう行かないと」
「うん」
女子たちが出て行く音が聞こえ、俺はほんのちょっとだけ扉を開けて外を確認する。
「よし、いないな」
もし、ばれていたらどうなっていただろう。きっと今頃学校の屋上で磔にされて頭にパンツをつけらえて笑い物にされていたに違いない。
その恐怖はバンパイアハンターにあった時と同じくらい怖いだろうな。ちなみに、バンパイアハンターにも二種類あって一つは見境なく吸血鬼を滅ぼそうとしている連中と、ＮＫＫに所属している者たちがいる。前者の場合は日中に集団で襲いかかるが今の時代ではそんなに恐ろしい相手でもないかな。だって吸血鬼も日中に活動しているからだ。それこそ人間が一個師団で襲ってきたとしてもおれでさえ負ける気がしない。
問題は後者の方だ。以前バンパイアハンターをしていた者たちが吸血鬼の現状を知って悪い吸血鬼だけを襲うのだ。何より装備が充実していてここのメンバーには勝てる気がしない。もっとも、俺がこの街に出没している吸血鬼にやられた場合はＮＫＫ総動員で件の

吸血鬼を滅ぼしにやってくる。
ＮＫＫは暇人が多いからな。中には会社に有給を出してまでＮＫＫのイベント事に参加するって吸血鬼もいるくらいだ。たとえどんなに優れた吸血鬼だろうと一国レベルの吸血鬼が一度に押し寄せてきたらひとたまりもないだろう。
「ん？」
誰かの視線を感じると思ったら一番奥の個室が少しだけ開いており、鼻先まで伸びた髪の間から目が見えていた。
「ひっ」
「……」
少女は静かに出てくると固まっている俺を引っ張って個室まで連れ込んだ。
え、な、なんでだ？もしかして俺をこれから水洗便所に頭を付けさせて水を流し、窒息させるつもりなんだろうかと考えていると今度は口をふさがれた。ち、ちくしょう、俺が本気になって暴れればこんなか弱い拘束なんてすぐに……
「……黙って」
怒られてしまった。
外から誰かの歩く音が聞こえてきた。ぼーっとしていたとはいえ、まさか誰かがトイレにやってくるとは思わなかったぜ。
ということは、この人は俺の事を助けてくれたって事でいいんだろうか。髪に隠れた瞳からは何も知ることは出来ない……出来ないんだが、色白で実においしそうな血を持っていそうだ。
女子トイレに入ってきた人物は少しだけうろついた後、俺が先ほどまでいた隣の個室の扉を開けて中に入った。そしてすぐさま出てくると今度はこちらの個室に近づいてきたのだ。
ノックの音が聞こえてきた。

「……入ってます」
その声を聞くと満足したようでノックをしていた人物は出て行った。少女も俺の口から手を放し、そっと個室の扉を開く。もちろん、そこには誰もいなかった。
「助かったよ」
「……須黒美咲」
「へ、あ、ああ、あんたの名前か」
「……窓から出たほうがいい」
窓の方を指をさしてから少女はトイレを出て行った。彼女が外に出たのと同時にチャイムが鳴り響き、俺は指示に従って窓から出た。
俺の事を助けてくれた須黒美咲と話すチャンスが再びやってきたのは意外な事にその日の放課後だった。

第十話

第十話

吸血鬼は人間の健康の事をよ～く考えている。飲まれる運命にあるのに優しさを半分持っているあの風邪薬みたいにな。

何故かって？そりゃ健康な人間の血はおいしいからである。誰だってまずいものは口にしたくない。メタボ体系で脂汗出まくり、常にふーふー言っているような奴の血は誰も飲みたくない。

「飲め、飲まないとお前を地獄に送るぞ」

そんな事を言われても絶対にのみたくない。よって、吸血鬼は人間の健康を気にする。もちろん、人間の事を餌だと思っているわけじゃない。まぁ、吸血鬼が人間に何かを与えているのかと尋ねられたら返答する自信はないけどな。

そしてもう一つ。人間の血は感情によって変わる。恐怖に慄いていたりする時に飲む血の味は癖のある物で大抵の吸血鬼には向かない。昔は襲って飲んでいたからそんな味ばっかりだったらしいけどな。今じゃ研究が進んで喜んでいる時の血が一番うまいそうだ。サディスト吸血鬼なら徹底的にいじめてから血を飲むらしい……正直、吸血鬼にも幅があるから一概には言えないけどな。

以前、吸血鬼の牙から人間の脳に快楽を与えるような成分が出るとか言っていたと思う。それもうまい血を飲むために本能的にやっているんじゃないかと言う話だ。

ちなみに、以前吸血鬼の血を飲んだ事がある。ありゃすごかった。何せ、飲んでから舌がしびれて大変な目にあったからな。二度と飲もうとは思わない代物である。

「ねぇねぇ、義人君って吸血鬼の組織から派遣されるぐらいなんだから強いんだよね？」

放課後、下駄箱あたりで千華にそう尋ねられた。そういや最近ずっと千華と帰ってるなぁ。まぁ、ちゃんとこれまで襲われた場所を

千華に教えてもらうって言う理由があるんだが女の子と変えれてラッキーかもしれん。もしかするとこのまま仲良くなってあんなことやこんなことを……ま、くだらない事を考えるのはやめとこ。
「強い……か」
千華に言われた事を真面目に考えてみる。いや、考えるまでもないな、俺は弱い。しかし、『僕ちゃん弱いんでちゅ』とか言えないだろ。
「千華、『強さ』って何だ？」
「え」
「……何度も敵にやられ、ぼろぼろになりながらも立ち上がって相手を倒そうとする。力及ばず、駄目だとわかっていてもやらなきゃいけないことを達成しようとする……」
「つまり、義人君は精神的に強いけど肉体的には弱いって事だよね」
墓穴を掘ってしまった。千華は誤解しているようだな。肉体的にも弱い、そして『精神的にも弱い』のが俺だ。
「ああ、そうだな。ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ弱いぞ」
それでも人間よりははるかに強い。たとえ重武装している人間が束になってかかってきても負ける要素が無い。ただし、素っ裸の吸血鬼が襲ってきた場合は負ける確率の方が高くなるだろうな。
「じゃあどうやって吸血鬼と対峙して相手を倒すの」
「そりゃ……ここを使うんだよ」
自分の頭を軽く叩く。
「なるほど、超能力だね」
「いや、頭脳」
「え、脳みそ取り出してサイボーグにでもなるのかな」
て、って、てってれー『サイボーグ吸血鬼大仁義人君』って何だか間抜けな響きだよな。
「……」
「弱いのならしょうがないよね。腕立て腹筋すればいいと思うよ…それか、血を飲むとかさ」

一朝一夕で強くなれるとも思えないな。血を飲めば一時的に強くなれるからあながち間違いでもないかな。
「そうだな……ん」
「どうかしたの？」
「あ、いや、何でもない。悪いけど今日は先に帰っててくれ」
「えー、襲われた場所にいかなくていいの？」
「ああ、いっつも千華に協力してもらってるし、ちょっと用事を思い出したんだよ。先生にどやされるかもしれないから……悪いな」
「ちぇー」
不平不満を言いつつ、了承してくれた。その後もぶつぶつ言いながら歩いて行くのを見届けたかったんだが大人しく俺は気になったほうへとはしることにする。
俺が向かった場所は中庭。異様に髪の長い女子生徒が曲がり角を曲がって行くのが見えたのだ。あんな髪の毛をしている女子高生なんて滅多にいないだろう。そして、間違えることもないはずだ。
「おーい、須黒―っ」
「？」
俺の呼びかけに相手は振り返ってじっとこっちを見るだけだった。視線が言いたいことは『何か用か』という冷たいものであった。まぁ、初対面って言うか友達じゃないからしょうがないかな。うーむ、こういった関係から他の女子と話して居たらジェラシー全開でつんつんしてくれる関係になれねぇものか。
あほな事を考えていては相手に失礼なので咳払いをしてから微笑みかける。これぞこの前編みだした『転校生さわやかスマイル』だ。
「今日助けてもらった事を改めてお礼を言いに来たんだ」
「……別にいい」
「そんな邪険に扱わないでくれよ。こっち引っ越してきて間もないんだ。本当、助かったんだってば」
転校してきて間もない生徒が女子トイレで発見された。一躍学校新聞の一面を飾るのは当然俺。あらぬ誤解と一人歩きする噂に俺の

評判はあっという間にガタ落ち、それこそ支持率は二割を割れ込む下落の一途をたどり、せっかく友人になれた青木千華なんかには後ろ指をさされる。挙句、フラグが立ったかもしれない他の女子からは目の敵にされていた頃だろう。

「……この前、私の演技に引っかかってくれた」

「へ、あー、トイレでの事か。って、あれ演技だったのか」

「……うん」

表情は読めない……髪のせいだな。なんでこんなに髪の毛を長くしているのかわからないし、詳しく知るにはもうちょっと仲良くなる必要があるんだろうなー。吸血鬼事件を終わらせる前に仲良くなれるかどうかなんてわからないけどな。あれだ、今から『一緒に帰らないかい、ハニー？』って提案すれば大丈夫だ。

「……じゃあ俺、帰るわ。今日は本当ありがとな」

結局勇気が無いのでこんな感じで終わるのだ。

「……」

すっと差し出された白く美しい肌の右手。それが一体何を意味しているのかほんの少しだけわからなかった。

「握手」

「ああ……」

握手って……なんでだろう。ともかく、俺は自分の手を制服で拭いてから須黒美咲と握手した。手はひんやりとしていて……なんかこう、よかった。

「……またね」

「じゃあな」

まるで力尽きた兵士が掲げる白旗のごとき右手の振り具合で俺に手を振ってくれた。俺もそれに軽く返してから家に帰る事にしたのだった。これからぼちぼちやっていけば仲良くなれるかも知れん。

第十話（後書き）

奇数→青木千佳で偶数→須黒美咲ってな感じで取り扱っていこうかなと思っています。というわけで次回は奇数一回目ですね。前書きでも注意を促すよう努力しておきます。

第十一話：ち：青木家の人々

第十一話

人間、生きる事に復習ってものが必要だ。此処では以前ひどい目にあったから行くのはやめておこうとか、此処のお姉ちゃんは優しかったからもいっかい行こうとかそんなのだ。

俺の名前は大仁義人。日本吸血鬼委員会、ＮＫＫから羽津町で起こっている事件の調査と収束の為に派遣された吸血鬼なのさ。特技は空を飛ぶ事だったが、他の吸血鬼も飛んでいる為に特別とは言えない。新たなる俺の特技は『舌先を鼻先にくっつけることが出来る』だ。

そして羽津吸血鬼事件の調査を手伝ってくれる事になった相棒が一人いる。名前を青木千華と言って襲われているところを俺が助け、協力者になってくれたのだ。

ただ、この青木千華と言う人物は世間一般常識である『やばい』を連発するような女子高生ではなかった。

「日曜朝七時前には必ず起きてるよ！だって戦隊ヒーローとか心に余裕を持ってみたいじゃん」

そんな女子高生。いや、いるかもしれないけどね。

「あ、そうだ義人君。中間テストも終わったからうちに来るといいよ」

言われた場所は羽津町と隣町の境目ぐらいの場所だった。最後の被害者が出た場所で、今では向こうも警戒しているのか千華を襲ってから行動はない。ただ、吸血鬼の血の匂いが時折風に乗って俺の鼻まで運ばれてくるのでこの町にまだいるのだろう。

「え？ああ……」

「家族が義人君に会いたいんだってさ」

青木千華の家に招待された事はこれまでに何度かあった。しかし、家族全員で俺を迎えてくれると言うのにちょっとだけ驚きながらも

承諾しておいた。晩飯の準備までしてくれるらしい。
「このまま行こうよ。さ、飛んで」
「あ、ああ…」
そしてやってきたわけだ。まー、なんというか……実に異様な光景だった。
カチャカチャという音が部屋中に鳴り響いており、千華の家族が持っているものは様々な色を併せ持った玩具、ルービックキューブだ。
「一面」
「二面」
「三面」
「四面」
「六面…く、駄目だ。五面達成は難しいっ」
そんなことを言って男泣きをしているのは多分、千華の父親だろう。
「パパ、めげちゃいや」
「そうよ、あなた」
「そうじゃぞ」
「諦めなければ何とかなるわ」
やったことないんだけど、あれって五面だけとかできたっけか。まぁ、そんな事はどうだっていい。家族全員でかちゃかちゃやっている光景なんて不気味で見ていられない。
「みんな、義人君連れて来たよ」
千華の言葉で俺がいた事に気が付いたのか一斉にこっちを向いた。正直、怖かった。
「おお、噂の義人君か」
「若人じゃなぁ」
爺さんとおっさんが俺の右手と左手を掴んで上下に振っている。どうすればいいのか対処に困った。
「あ、ほらほら、義人君が困ってるよ」

「おお、すまんなぁ」
「千華が男を連れてくるからどんな覆面ヒーローかと思ったが普通の男子生徒で安心したよ」
「ヒーローが大好きだとかで困っていたのよ」
よく言えば親しく、悪く言えば馴れ馴れしい家族である。しかし、家族の間でも問題になっていたんだな……ん？
俺の股上ぐらいを触っている女の子を発見した。
「あ、この子はあたしの妹。由香、挨拶してちょうだい」
「青木由香、十二歳です。変身ベルトはどこですか？」
「えーっとね……」
どういえばいいのだろう。というか、変身ベルトって何だろうか？
「あ、ベルトじゃなくて眼鏡とかスプーンとかで変身するんですね？」
「あー……」
千華の方へと助けを求める。アイコンタクトで伝わったようで口を開いてくれた。
「あのね、由香、義人君は……」
青木由香と名乗った少女の耳元で何かを呟く。少女は顔を真っ赤に染めると部屋から出て行ってしまった。
「千華、何言ったんだよ……」
「何？千華？呼び捨てだと…」
父親の表情がさっと変わった。呼び捨てがまずかったらしい。
「あ、いや、青木さん、妹さんに何言ったのかな？」
「いや、呼び捨てなんて気にしないでくれ。まさかそこまで親密だったとはな。母さん、花婿が来てくれたんだ。酒を出してくれ！」
奥さんはこっくりと頷くと何かを決意したまなざしで旦那を見ていた。
「わかったわ」
「よかったのー、千華」
「え、あ、何か勘違いしてるみたいだけど義人君はそんなんじゃな

いから」
そんなんじゃないから……ちょっとだけ俺の少年袋が傷ついたりした。確かにそんなんじゃないけどな。はは、はぁ……。
いつかそんなんだよと言ってもらいたいものではあるな。

第十一話：ち：青木家の人々（後書き）

念のためですが、奇数話と偶数話で話が違ってきます。どうでもいい？まぁ、そうでしょう。ともかく、変わってきます。

第十二話：み：ファンタジー

第十二話

アステラッド王国から北へ進む。途中、二つの村を挟むことになるが、その先にはミハラ荒野が広がっている。

「姫、直に吸血鬼の根城につくころでしょう」

「そうですか」

「ええ、これからは気をつけて進みましょう」

ミハラ荒野の先に城をかまえる吸血鬼は王国の人々を襲い、近隣の村をも恐怖の底へとたたき落としていた。

数度の討伐隊が組まれ、幾度となく争いがおこったりもしたのだが誰一人としてこの吸血鬼を倒せたものはいない。

数えて十七の歳になった姫は自ら討伐隊に名乗り出て少数精鋭で倒すことを王に誓ったのだ。

「姫、あれを見てください」

宮廷魔術師が指差す先には暗雲が立ち込めていた。

「あれは…」

「…大仁君？」

「うわ、須黒かよ…驚かせないでくれ」

少々集中しすぎたようである。下駄箱前で偶然出会った須黒美咲に声をかけると図書館に行くとのことでついてきたのだ。

羽津吸血事件の新聞をもう一度読もうかと探していたら吸血鬼の小説を見つけたのでついつい読んでしまった。絵は最近の萌え～が入った感じのもので少し残念だけどな。

「…ごめんね」

「いや、もういい。どうせ最後まで読むつもりはないから」

持っていた小説を本棚に戻し、鞄を持って立ち上がる。

「で、須黒は何の本を借りにきたんだよ。まさか呪術とかそんなんじゃないだろうな」
暗い、話し方が独特、影がある…ファーストコンタクトなんて男子トイレの床だったからな。ちょっとした学校の怪談だ。
「…呪術とかじゃないよ」
「そりゃそーだよな。そんな本が図書館にあるわけ…」
「…家にたくさんあるから借りる必要ない」
「……」
ま、まぁ、趣味は多様でいいんじゃないかな。
「じゃあ何借りたんだよ」
「……」
黙って借りた本の後ろに顔を隠した。俺は緑の文字で書かれた文字を読む。
「えーっと、『友達と仲良くする方法（序）』か」
「……」
読まれたことでさらに恥ずかしくなったようでさらに頭を隠すようにしている。どうでもいいけど、本の下から顔が出ちゃってるぞ。
「…私たち…友達…なんだよね」
「あ、ああ」
そう言ってくれるのはうれしい、しかし、無表情でどうでも良さそうに言うのはやめてほしいな。さっきみたいに本で顔を隠すとかしてくれるともっと嬉しいんだが。
「…これで大仁君と仲良くなって友情波を出す」
聞きなれない単語である。一体友情波ってなんだよ。
「で、仲良くなるにはどうしたらいいって書いてるんだ」
「……第一ステップ『同じ部活に入ったり、グループに所属しましょう』ってある」
「同じ部活…ねぇ」
二年でこっちに転校してきたから部活なんて入ってないな。向こうでは一応入っていたんだぜ？『古城研究会』って部活だな、うん。

「…大仁君の部活は？」
「俺はまだ転校してきて間もないからな。入ってねぇよ」
「……そう」
しばらく考えてから俺を置いて図書館から出ていく。
「あ、須黒っ」
「図書館では静かにっ」
「すみませんっ」
図書委員に頭を下げてあわてて須黒のあとを追う。帰るつもりなのかと思って追いかけるも、下駄箱とは違うほうへと歩いていく。
「え、どこに行くんだよ」
「部室。先生に大仁君の入部届けを持ってく」
「持ってくって…」
須黒が入っている部活って何だろうか。どうせ黒魔術同好会とか山羊を生贄にする会なんてそんな暗いものなんだろうな。そんなところには絶対に入らないぜ。
俺が連れてこられた場所は理科室。うーん、何とも言えない薬品の匂いが俺の鼻を襲うぜ。
「ここが部室か」
「…うん、入って」
須黒はさっさと扉を開けて中に入る。俺もそれに続いた。
「あら、須黒さん」
「…先生、新入部員」
そこにいたのは俺の担任をしている玉宮菜穂子先生だった。ちゃんと覚えているだろうか？俺が初めて図書館に行った時に出会った人物である。
「あのー、先生」
「何かしら」
「この部活って名前何ですか」
「須黒さん、教えてないのね」
そんなことをいう先生に須黒は本日借りてきた本を見せていた。

しばらくの静寂を経て、先生は納得したようで俺にこういうのだった。
「この部活はね、『吸血鬼研究会』よ」
「え…」
その後、あれよあれという間に俺は『吸血鬼研究会』の部員となってしまった。

第十二話：み：ファンタジー（後書き）

こっちの偶数話ではいろんな話を入れていきたいと思っています。
勿論、義人がやってきた事件も同時に進行していく予定なので期待しないで待っていてください。

第十三話：ち：羽津高校襲撃事件

第十三話

吸血鬼の中にはストーカーを行う奴もいる。これはまぁ、ふーんと思うかもしれない。しかし、考えてみてもらいたいことだ。空を飛ぶ、匂いで相手を追跡する、おまわりさんとこんにちはしても睡眠術でどうにかなるといった超絶スキルを保有しているのだ。

そんな俺も千華を尾行している。もちろん、気が付かれてはいない。

いや、正直に言おう。尾行していた、なんて嘘だ。たまたま偶然、帰るのがちょっと遅くなったから千華に先に帰ってもらっていたんだ。そうしたら先生が『今日は休養が入っちゃったからまた今度ね』なんて言うもんだから急いで後を追ったんだよ。吸血鬼だからにおいを頼りに千華を追いかけ、とある空き地の前までやってきた。

「正義の使者、チカメンさんじょー！」

まさかクラスメートの見てはいけないものを見てしまうとは思いもしなかった。

「きょー」

「きょー」

小学生（低学年）と思われる相手にヒーローショーを行っており、しかも風呂敷マントまでしっかりと着けている。ネーミングセンスの欠片もない『チカメン』はあっというまに戦闘員を蹴散らして怪人役の男の子に人差し指を突き付ける。

「さぁ、世界をへんぺーそくで一杯にしようとしている悪者よ、その子を開放しなさいっ」

「ふはははは」
「もうっ、笑い方は『へんぺっぺっぺ』でしょっ！」
「あ、ごめんなさい……」
見ていて可哀想だな。
「へんぺっぺ、甘いな、チカメン…」
その後は見ていて恥ずかしくなるようなものだったので詳細を省く。何が目的でこんな事をやっていたのか俺は知らないし、知りたくもない。
「一緒に帰ろうぜ」
もちろん、そんなことは言えない。放課後誘って何か青春的な甘酸っぱいイベントを期待していた俺は気付かれない様にその場を後にした。

後日、朝のＨＲが始まる前に千華から何かを渡された。
「はい、これ」
「なんだこれ」
「夏服に変わったでしょ？だから義人君にもちょうど似合うかなーって思ってさ。とりあえず家に帰ったら開けてみてよ。あ、言っておくけど盗まれたりしたら承知しないからね」
「あ、ああ…」
一体何が入っているんだろうか。食い物じゃないだろうし、似合うかなって言ったのだから服か何かだろうか。
「いつつ……」
「あれ？どうしたの」
「…昨日、血を吸った相手が悪かったみたいでさ。腹の調子が悪くなったんだよ」
手渡されたものを机の中にしまってからため息をついた。この中に胃腸を整える薬があればいいんだけどなぁ……飲んで治るかどう

かは知らないけどな。
「じゃあ早くトイレ行ったほうがいいんじゃないかなぁ？」
「いや、何とかなるだろう」
結論から言おう、一時間目の途中でやばくなった。どのぐらいやばくなったかって？そりゃ、手持ちが全部倒されて目の前が真っ暗になったやばさだ。
「…せ、先生、トイレに行ってきます」
「わかった、出してきなさい」
行ってきなさいならわかるけど、出してきなさいっておかしくないかと疑問を持つ余裕なんて一切ない俺は急いで教室を後にした。千華の声がクラスを大爆笑に陥らせたようだが、何と言ったか興味もなかった。
トイレに入る時に大人数の人の気配を感じた。しかし、そんなものを気にしている場合でもなく、三階男子トイレの扉を素早く開けて一番奥に陣取り、きたるべき『対話』のために迎撃態勢を整える。
ふと…小学生の頃、先生にしょうもないことを尋ねた事があったなと思いだした。

「先生、じょーわんにとうきんはさつきちゃんとめいちゃんを振り回すためにあるのはわかりますけど腹筋は何のためにあるんですか？」

先生は確か『踏ん張る為にあるんですよ』と答えた気がする。あれは適当に答えたんだろうなと今思えばわかるんだけども当時の俺は素直すぎたからな。
「なるほど、わが子を迅速かつ、鋭く排出するためにみんなは腹筋を鍛えているのか」
なんて馬鹿な事を考えていたからな。本気でやって便器を貫かせ

たのはまずかったな。
「んぉ、来た…」

〜しばらくお待ちください〜

対話を終え、個室から出た俺はいまいちな顔をした男子生徒を眺めつつ手を洗う。何か聞こえてきたので耳を澄ませると以下の内容が流れて来た。
『…我々はこの学校を乗っ取った。要求を飲まなければこの校舎は爆破させる。もちろん、下手に教室から出ようなんてするなら扉に設置しておいた爆弾が爆発し、ただでは済まんぞ。これは冗談ではない、本当の事だ』
「……梅雨に入ったからバカでも湧いたのか」
ぼーっとしていたら先生に怒られるからな。とりあえず教室に帰るか。
トイレの扉に手をかけてそのまま押す。ちゃんと扉の取っ手の部分に『押』ってプレートが付いていたから間違いないだろう。これを引いても何も起こらないはずだ。
くだらない事を考えながら扉を押すとさっきの放送が本当だったと言う事を知った。
羽津高校三階男子トイレの扉が爆発したんだからな、信じないほうがおかしい。

第十四話：み：文学

第十四話

私が大島を訪ねるのは何年振りだろうか。別れた妻の好きだった場所、そして私達二人を祝福してくれた場所だった。しかし、もう二人で此処に来ることなどあり得ないのだ。

「あなたの妻でいる事に疲れました」

そう言って妻は私に頭を下げたのだ。明け方はいつもの通り、笑みを絶やさぬ女性だったと言うのに判を押した薄紙を渡すときは笑みなどどこにもなく、どこか苦しそうに見えた。

「後悔しないのか」

「はい」

素っ気なく、感情のこもっていない返事は私に続きの言葉を言わせることはなかった。ただ一つ、頷いて寝室から判子を持ってきてその薄紙に押しつけた。

「ありがとうございます」

妻の、いや、元妻の感謝の言葉は私の心を抉って二度と感知する事のない傷を負わせてくれたのだ。

幸い、子供のいない家庭で良かったかもしれない。子供の出来ぬ身体だと結婚前にいきなり告げられたが、そんな事はどうでもよかった。一緒に暮らせればそれでいい、私と一生いてほしいのだと伝えたあの日の言葉を思い出す。

元妻が、君江が私に離婚届を渡した理由は今となってはわからない。離婚して一カ月後、君江は自らの命を絶ってしまったからだ。後を追う事も考え、一度は準備までした。しかし、あちらに行って君江に会ったとしても私は拒絶されるに違いない。

大島も昔と違っている。もしかしたら、君江の好きだった私も変わってしまっていたのだろうか。今となっては知る由もない。

「みんなー、今日もありがとー」
テレビからよく知るアイドルの声が聞こえてくる。読みかけの文学作品をさっさと閉じて椅子に座りなおして、音量を大きくした。
「お、そういえば今日はりっこちゃんの番組があるんだったな」
部室である理科室で見るのはいかがなものかと思うだろう。しかし、先生も今日は出張でいないし、須黒も休みだ。つまり、今この理科室の主は俺なのである。下僕の骸骨と人体模型と一緒にりっこちゃん観賞が今日の部活内容だ。
「大仁、おれもまぜてくれよ」
理科室の扉が開いてカメラを抱えた緑川が入ってくる。
「なんだ緑川かよ」
「なんだとはなんだ。お前一人で見るなんてもったいないだろ」
「もったいなくはないだろ」
どこがもったいないのか、詳しく尋ねようと考えるも止める。そんなことよりりっこちゃんだ。
「しょうがないからお前も見ていいよ」
「なんだか引っかかるような言い方だな。ところで、最近放課後一緒にいる須黒美咲はどうしたんだよ」
緑川の声がうるさいので音量をさらに大きくする。
「さぁな。今日は休みだそうだ」
「ふーん、そうなのか。お前、ここに須黒がいたらこれみるのかよ？」
「そりゃそうだろ。先生が出張だから見てもいいだろ。どうせ研究とか言って吸血捕獲用のくだらない罠を作るよりも、りっこちゃんを見ていたほうが健全だ」
「まー、たしかにそうだわな」
「おう、テレビなんかじゃなくていつか部費でコンサートを見に行きたいもんだ…」

俺がこの場所にやってきたのはあくまでＮＫＫの調査のためだ。
これまで幾度となくコンサートが行われる日には騒動が起こっていたからな、行った事が無いんだよ。
そんな不運少年の俺にすっと一枚のチケットが差し出される。
「元気出せよ。これ、やるからよー」
「これはっ…」
隣県のコンサート場で行われる真白りっこちゃんのコンサートチケットだった。
「どういう風の吹きまわしだよ」
「いや、この前懸賞で偶然手に入ったんだよ。だから大仁にやるよ」
怪しい、絶対に怪しい。これは俺の事を何かしらの罠にはめようと思っているのかもしれないぞ。
「…で、だ」
「やっぱり何か裏があるんだな」
「そりゃそうだ。世の中ギブ君とテイクちゃんで成り立ってるんだよ」
その通りだろうな。
「金ならないぞ」
「違う、金なんていらねぇよ」
テレビではりっこちゃんのインタビューが終わり、新曲のお披露目があっていた。
「…実はだな、俺らの担任でお前の部活の顧問である玉宮菜穂子先生が吸血鬼なんじゃないかって話があるんだよ」
「え？」
にわかには信じられないような話だった。
「……詳しく教えてくれよ」
「一番最初に襲われた女子生徒とかに話を聞いていたり、目撃者のおばちゃんたちへと聞き込みを俺はやったんだよ。するとさ、最初の方はもうあまり情報が得られてないんだけど、玉宮先生を見たって言う人が結構出て来たんだよ」

「……本当かよ、それ」
「ああ、警察もそれを怪しんでいたようだ。だけど、先生自体が途中で襲われているからな。警察はその可能性を消したんだよ。その後、事件現場での先生の目撃報告はない…でも個人的に気になるから調べてほしいんだ。おれよりお前の方が玉宮先生に会うからな」
「で、俺は玉宮先生が吸血鬼かどうか調べればいいだけなのか？」
親父に連絡してから名簿を確認してもらうだけでいい。違うのなら夜道で襲って血を飲んでみれば一発でわかる。
「ああ、違った場合は先生に謝っておいてくれよ」
「わかった」
たったそれだけならお安い御用だ。
「でもよ、先生が吸血鬼だったとしても素直にはいそうですって言わないと思うぜ」
「…まぁ、そん時はしょうがねぇ」
「しょうがねぇって……」
「ともかく、俺は吸血鬼の写真を撮れればいいんだよ。何ならお前が裏地の赤い黒マント着るか？」
「死んでもいやだね」
俺の親父なら快く引き受けてくれるに違いない。大体、創作物の後付けだろうに……。まぁ、先生が吸血鬼かどうか調べるのは俺にとっても有益だろう。これまで相手は男とばかり思っていたんだけど、もしかしたら変わった味覚の持ち主かもしれないからな。

第十四話：み：文学（後書き）

サブタイトルの文学後にはなんちゃってがつきます。え？なんちゃってすら生ぬるい？見逃してやってくださいよ、旦那。

第十五話：ち：反旗を翻す一生徒

第十五話

ＮＫＫでもちゃんと報酬は支払われる。無論、保護者などがＮＫＫに所属しているならばそちらの方に振り込まれる。職を持っていない者は一人前と思われない為、身元引受人もいない吸血鬼はお金も貰う事が出来ない。

大抵の吸血鬼はちゃんと職を持っているし、学業を疎かにするようなものがＮＫＫからの仕事をもらえると言うわけでもない。その為、報酬をもらっている吸血鬼の割合は全体的に見て少ないが川でおぼれている子供を助けたとかそういった行為を行うことによって一般の吸血鬼だってもらえるわけだ。

つまりは高校を占拠するような連中をけちょんけちょんにしてやれば、俺はかなりの額を手に入れる事が出来るのだ。

男は実に物騒なものを持って学校の廊下に佇んでいた。彼の仕事は今のところ見張り。高校時代にスカウトされてその道に入り、特殊部隊の一員として生活しているのだ。高校を襲撃した事に関しては特に何も思ってはいない。仕事は仕事と割り切るタイプなのである。

誰も見ていないからさぼっちゃえとか授業風景ってこんな感じなのかなぁなんて教室を覗いたりしない、プロだから。

先ほどの爆発音の時も動じることはなく、見張りが一人見に行った。そろそろ戻ってくる頃合いだろう。

「…ん」

気のせいだろうか…足元から何か音が聞こえてくる。男はしっかりと足元を確認しようとしてすごい速さで天井に頭をぶつける事となった。

「ふぅ…ったく、高校が占拠されるなんて信じられないね」
扉を開けたら爆発するし、テレビで見たような重武装した人がこっち来て俺に銃を向けてくるし……一体何が起こっているんだろう。もちろん、そんな恐ろしい相手にはそれなりの対処をさせていただいた。爆発で制服も吹き飛んじまったけど、トイレで誰かの忘れ物の体操服を手に入れられたからラッキーだったかな。
「…この階には見張りがいないのか…ってここは五階か。三年生の教室がいっぱいだよなぁ……」
他に見張りは居ないのだろうか、スパイ映画よろしく壁に背中をくっつけて近くの廊下へと移動する事にしたのだった。壁をこつこつと叩いても頭に『！』マークが出たかどうかも確認できない。
「うん、いないな。とりあえず俺のクラスの生徒達も監禁されているだろうから偶然を装って助けに行こう」
三階に下りる途中でも見張りを一人発見したので背後から強襲。その後はひん剥いて廊下の壁に貼りつけておいた。ついでに血も吸っておいたので目を覚ましたとしても貧血で倒れるに違いない。
「今思えば三年生を助けておけばよかったかな……いや、後で助ければいいか」
後悔するよりも前に進むことだけを考えよう。もし、負傷者が出たとしても俺のせいではない。俺はこの学校の何の変哲もない生徒だ。
曲がり角を曲がって見張りっぽい人が立っていた。すぐさま股間を蹴りあげたのだが反応が無い。焦った俺は腹部に五発、そしてアッパーを格ゲーよろしく綺麗に決めて相手を吹き飛ばした。壁にめり込むなんてそうそうみられないだろうな。
「……あ」
そしてその見張りがトイレから出た時に遭遇した相手だと言う事

に気が付いた。もちろん、既に気絶している。
「…あまり手加減せずに殴ってしまってすみませんでした」
間違って相手を傷つけてしまった時は急いで謝らなければならない。しかし、あっちが悪いのである。学校を占拠した挙句に爆弾なんて取り付けるから罰が当たったんだと思ってもらいたいものだな。
自分の教室前までやってくると扉の部分に爆弾が取り付けられていた。『爆弾です。取扱い注意』と書かれているから間違いないだろう。
「うーん、どうすりゃ解除できるんだろうか」
もしかしたら専用の道具とか必要かもしれないな。いやいや、赤か、青か、そういった選択をして初めて解除できるような代物かもしれない。
もう少し情報が欲しかった俺はじっくりと爆弾を眺めた。

『ＯＮ／ＯＦＦ』

電源の下には扉を開けるとスイッチが即入るように仕掛けられていた。とりあえず、爆弾ごと引っ張ったら扉が開いてしまった。
「……」
「あ、義人君っ」
当然、俺の教室だから千華がいるわけで、ついでに授業が行われていた。授業中にトイレに行ったんだから戻ってきても授業中だろうな。しかし、普通に授業をしているっておかしくないだろうか。
「あのー、先生、今って学校占拠されてませんか」
「そうだが、授業中だろう。それに廊下に出たら扉に付けられている爆弾が爆発するそうだぞ。さっき爆発音がトイレの方から聞こえてきたのだからまちがいないだろうな」
その通りである。被害者は俺だ。

「でも、今なら逃げられますよ」
「何、そうなのか」
「ええ」
おおー、そんな声をクラスメートたちがあげる。
「多分、見つかったら撃たれるんじゃないかなぁ」
千華の一言でクラスはまた静かになった。
「それに、占拠している人たちがここにきたらまずいんじゃないかな。扉も壊れてるし…」
「大仁、扉を直してきなさい」
「わかりました」
「あ、私も手伝うよ」
千華と一緒に廊下に出て扉をはめなおす。もちろん、爆弾も元に戻ってしまった。
「これさ、開けたら爆発するんだよね？」
「そりゃー、そうだろうな。さっき扉開けたら爆発したから間違いないだろうな」
「え、じゃあさっきの爆発音って義人君だったの？」
「ああ、開けたらいきなり爆発したからびっくりしたぜ」
「なるほど、だから体操服なんだね」
納得したとばかりに頷いている。
「怪我とかしてないの？」
「あの程度なら大丈夫だよ。とりあえず、他の見張りも何とかしてくる。そうしたらまた呼びに来るから教室内にいるといい」
「えー、あたしもついてくよ」
「いや、危ないだろ。相手は銃を持っていたからなぁ。近くで見たからまちがいない、あれは本物だな、うん」
そんな時に千華から何か手渡された。
「なんだこれ」
「もうっ、忘れちゃったの？今朝あげた奴だよ」
「あー、あれね。で、これが何か役に立つのかよ？」

役に立つよと頷いて千華はその包みを俺の前で広げてくれた。
「じゃじゃーん、吸血鬼の必須アイテムのマントだよっ」
「……」
「前々から義人君が吸血鬼って言っていても何かおかしいなぁって思っていたんだけどこの前やっとわかったんだ。マントを付けていないってね。だから作ったんだよっ……って、あれ、義人君？」
「……いや、別にマントはいらねぇよ」
「あ、そっか。マイマント持ってるってことだよね？でもさでもさ、せっかく作ってあげたんだからこれからこっちを愛用してくれると嬉しいんだけど」
「……マントはもってねぇよ」
「じゃあよかった！はい、これをこうしてこうやって……出来上がりー」
裏地は真紅の黒マント。これを着用すればあっという間に貴方も吸血鬼に……はぁ。
「それにね、襟も立っているから…横から見られたり、後ろから見られたぐらいなら義人君だってばれないと思うよ」
「…なるほど」
「うん、義人君はヒーローだからね。顔はちゃんと隠さないと駄目だよっ」
そういって千華は俺に親指を立ててくれた。
「じゃ、行こっか」
「…いや、あぶねぇよ」
「一般人はヒーローが護らないと駄目だよ。だから危なくなったら護ってね」
「……はぁ、わかったよ。その代わり、俺の言う事はちゃんと聞いてくれよ」
「はーい」
大丈夫なんだろうか…かなり不安だ。

第十六話：み：ＳＦ（前書き）

ボタン連打すると壊れるもんなんですよ。

第十六話：み：ＳＦ

第十六話

「マ、マスター、そんなに…それ以上はこ、壊れてしまいますぅ」

「あん？壊れたって大丈夫だよ。直してもらえばいいんだからよぉ…それか、新しく買い変えるか、どっちかだな」

「そんな…」

「じょーだんだよ、冗談。お前じゃないと意味がないからな……全く、機械が心を持つなんてすごいもんだ」

「あっ、あっ……くっ…そ、それはマスターが…」

「……大仁君、何読んでるの？」

「うわぁぁぁぁあっ」

俺は読んでいた本を宙に放り投げ、落としてしまった。表紙を読まれない様に急いで裏返しにして腰にはさんだ。

「須黒ぉ、驚かすなよ」

「……」

須黒は何を言うでもなく、俺の後ろに回り込もうとした。俺も身体を動かして背中を見せない様に努力する。見られたら破滅である。

「……大仁君、見せて」

「駄目だ、これは男の浪漫だからな。それに単なるＳＦ小説だよ。いや、正確には未来のＳＦラブコメディーなんだ」

「……本当？」

嘘はついてない。しかし、たまにあるだろう？後ろめたい事とかやっていて説明が必要なときとか……自信を持たないとばれちゃうからな。

「ああ、本当だ。自慢じゃないが俺はこれまで嘘を年に二十回ぐら

いしか付いた事がない」
緑川に借りたもので、俺のものではない。こんなマニアックな小説誰が買って読むんだろうかなぁ…読んでみたら少しだけ面白かったけどさ。
「ともかく、これから部活だろ、さっさと行こうぜ」
これ以上話を続けると何かしらぼろが出るだろう。ばれたら最後、『エッチな小説を熟読している転校生』という肩書きを得た俺は後ろ指を指されて高校生活を送る羽目になるのだ。
「……今日は部活休み。玉宮先生が大仁君にそう伝えておいてほしいって言ったから探しに来た」
「そうなのか」
部活の話でもするつもりだったのに今日が休みとは残念なものだな。
「じゃあ、今日は帰ろうぜ。須黒もやることないだろ？」
須黒が少しだけわき見をした瞬間を俺は見逃さなかった。思案しているうちに急いで鞄の奥底に小説を押しこんで立ち上がる。
「…わかった」
そう言った後に俺の後ろへと移動し、腰辺りを見ている。しかし、当然ながらそこに本はない。
「たまにはどっか寄って帰るか？あ、そうだ。俺、須黒ん家にいってみたいなぁ」
「……私の…家？」
「ああ」
しばらくの間考えているようだった。すごく長い時間が過ぎたようだが、一分程度だろう。
「嫌」

「……嫌、か」
女の子の家に行きたいと言った。拒絶された、一言、『嫌』と…。結構心を抉る言葉だな。
「じゃ、じゃあ俺の住んでるアパートに遊びに来るか？」
これまた嫌だと言われたら『そ、そうか…』といって一人さびしく帰るつもりだった。でも、いないだろうけど神様は俺の事を見放したりしなかった。
「わかった…」
「お、そうか…そりゃよかった」
そして俺の住んでいるアパート（リバーサイド『満開』はさすがに恥ずかしいな）に招待する事になった。
考えてみたら女の子を自分の部屋に招待するなんて何年振りだろうか。うーむ、これは何かいい所を見せたいもんだなぁ…でも特に何もないのが残念だ。
帰りつくまでに何か思いつくかと楽観視していた…まぁ、結果は『なにも思いつきませんでした』なんだけどな。いや、客観的に考えてみれば何かいい事が思いつくかもしれない。
うーむ、こんな感じだろうか…若い吸血鬼のところに麗しき（？）乙女が何も知らずにやってきた。吸血鬼は料理を出すと言って引っ込む。出て来た料理に口を付けた乙女は眠ってしまう。次に乙女が目を覚ました時には首筋に牙を突き立てた吸血鬼が…いや、駄目だな。
じゃあ健全な男子が考えるようなものがいいのかもしれない。男子の部屋に女子がやってくる、色々と話をしていくにつれてコーヒーが進み、男はお代りをついでこようと立ち上がるも部屋に落ちていたバナナの皮に引っかかって女の子を押し倒してそれから……
「……大仁君」
「へ、な、なんだ」
「目が怖い…」
「あ、あ、そうか？」

「…うん」
「悪い…じゃ、入るか」
鍵をひねって中に須黒を入れる。彼女が帰るまで適当な世間話をしてお茶を濁し、帰ってもらう事としよう。
いくつか部屋があるんだが、使用している部屋は三部屋。残りは全て物置である。自室は少し散らかっているし、下手をして吸血鬼についての調査書類なんか見られたら面倒だから台所が間近にある応接間に案内しておいた。
「……真白りっこの……ポスター？」
「あー、それか。一番気にいってるものなんだ。やっぱりこういうのは一つだから映えるんだよなぁ」
コーヒーを入れて須黒の前に置く。
「……真白りっこ…好きなの？」
「最近のアイドルにしちゃ売れた後にばら売りじゃない一人だし、普通にかわいいだろ」
「……」
「一応ライブのＤＶＤもあるけど実家に置きっぱなしだから此処にはねぇんだ」
世の中にはＤＶＤをコピーするとか言う何とも業界にとって悪い事をしている人がいたりする……ちゃんとＤＶＤは買いましょう。
「…見なくていい」
「そうか、残念だな」
真白りっこはどちらかというと男よりも女に人気がある。何でも、りっこちゃんの事を嫌いな男から言わせれば『アイドルっぽくない』のが原因だそうだ。
「そういえば、須黒ってりっこちゃんっぽいんだよなぁ…」
髪からちらりと見える瞳は俺の方を見ていた。いや、なんだか睨んでいるように見えて怖かった。
「ど、どうしたんだよ」
「……別に」

「もしかしてりっこちゃん嫌いなのか？」
「……そうじゃない」
うーむ、何か気に入らないことでもあったのかねぇ…よし、じゃあコンサートに誘ってみるかな。
緑川からもらったチケットを持ってきて須黒の前におく。
「これは…」
「この前緑川から交換条件でもらったんだよ。二枚あるから一緒にいかないか」
「……ごめん、この日は用事がある」
「そうかぁ…残念だな」
女の子を誘って失敗すると地味に心が傷つくな。うう、初めて誘ったのに……。
「じゃあさ、いつか一緒に行こうぜ」
「……」
しばらく俺を見てから須黒は頷いた。とりあえず『いつか一緒に行く』という約束さえとりつけておけば後で強引に誘う事が出来るかもしれない。最近、吸血鬼探す事を疎かにしているようだけど…大丈夫か、俺？

第十七話：ち：偉い人は高いところが好き

第十七話

吸血鬼がどれだけ丈夫な存在なのか…疑問に持つこともあるだろう。よくある話じゃ銀の弾丸とやらで一発らしいな。俺自体銀の弾丸を喰らった事はない。ただ、親父は心臓に一発もらった事があるそうで感想を聞いたところ『それなりに痛かった』そうである。ちょっとグロテスクな話だが、それじゃあ首と胴体を離してみたらどうか？その状態を二週間保てば吸血鬼は死んでしまうらしい。江戸時代にさらし首にされた吸血鬼は己の首を探してさまよい、その光景を見た人たちが後世に『首なし武者の話』を伝えたそうである。

ともかく、現行武器に対してめっぽう強い吸血鬼だ。それこそ専用装備ではないと倒すのは難しい。たとえ、俺みたいなへっぽこ吸血鬼だったとしてもな。

「ねぇ、義人君」

「なんだよ」

「……偉い人ってどこにいるのかな？やっぱり、屋上だよね」

「どうだろうなぁ」

今からでも教室に連れて帰った方がいいのかもしれない。しかし、途中でまた面倒な事になるのもごめんこうむりたいものだ。結局、他にあてがない為に千華のいうとおり屋上へと向かう事にした。

四階へ続く階段のところで見張りを見つけたため、千華に隠れているよう指示。手早く気絶させてパンツ一丁にしておいた。

「義人君、なんで裸にする必要があるの？」

縛り上げている最中に尋ねて来たので物騒な代物を指差しておいた。

「そりゃ、目を覚ましてナイフとか隠し持っていたら逃げられて大変だろう。だからこうやって裸にしておくのさ」

「ふーん、そうなんだ。手慣れてるね？」

そういうのは俺の手元を見て言ってほしいものだな。切らない限りほどけないし、ほどこうにも吸血鬼の腕力で縛っておいたから難しいだろう。
「あ、義人君…見張りがいるよ」
「ん、ああ…じゃ、気を付けて気絶させてくる」
「ちょっと待ってよ」
廊下に出て行こうとした俺を階段踊り場まで連れ戻す。不謹慎だけど腕の部分にむ、胸が当たって……いや、何でもない。
「なんだよ？気付かれたらやばいだろ」
「あたしに作戦があるんだ」
「作戦って…俺がちゃちゃっと終わらせた方が早いだろ」
出て行く、殴る、終わり…簡単スリーステップで見張りの人をあっちの世界に送ってあげられるんだからな。一番楽なんじゃないだろうか。
「それもそうだけどさ、もうちょっと目立たないやり方でやったほうがいいと思うんだ。さっきから義人君が見張りの人たちを壁にのめり込ませたりして校舎に被害が出ているし…」
「た、確かに…」
非常事態と言う事もあってそれなりに対処させてもらっている…だが、やはりまずいかもしれない。
「それにさ、これ終わった後に僕がやりました～って義人君言わないでしょ」
「そりゃそうだろ。そんなことしたら柔道部とか空手部からお誘い受けるぞ」
意外なところでアームレスリング部かもしれないな。
「だから、もうちょっと校舎に被害が出ないようにした方がいいよ」
「でもよぉ、今更やってどうするんだよ……」
「……そこの二人、両手を上げろ」
後ろを振り返ると目だし帽の特殊兵みたいな見張りが俺たち二人に銃を向けていた。

「怪しい奴らだ」
「あ、あたしたちは全然怪しい奴じゃないですよっ」
「そうだ、俺たちはこの学校の生徒だ。自分の教室に行く為に一階から上がって来たんだよ」
「ちょっと、義人君っ」
「何、一階から上がってきただと？見張りがいただろう…動くなよ、動くと撃つぞ」
もうっ、義人君のせいでこんな事になったんだからねっ。どうにかしてよっ。そんな千華の視線を受けて俺はため息をついた。
「あのー」
「なんだ……うっ」
ちょっと睨んでやると相手は倒れてしまった。トランシーバーで誰かに連絡するつもりだったらしい。
「あれ、なんでこの人倒れたの。貧血かな」
「さぁなぁ、貧血なんじゃないのか。とりあえず、裸にして縛り上げだな」
千華に説明するのが面倒な為になんで倒れたのかは伏せておくとしよう。きっと説明したところでうまく伝わらず『すっごーい、吸血鬼って目からビームも出せるんだ』と言われるに違いない。どうも最近、千華に『吸血鬼とはびっくり人間』と思われている気がする。
「そう言えばさ」
「ん、何だよ」
「一人捕まえてこの学校に何人でやってきたのかとか、目的は何だとか…色々聞いたほうがよかったんじゃないかな」
「……いや、俺もさ、考えてたよ。うん、屋上に一番偉い人がいるのならその人に聞けばいいだけだからな。さ、急ごう」
「えー、嘘っぽいよ」
肉体的に優秀な吸血鬼は頭の方も優秀……と言うわけでもない。やはり、こればっかりは勉強とかして鍛えないと頭の回転が悪いみ

たいだな。
　次の見張りは捕まえようと心に固く誓ったはずだが、屋上までの道のりに一人もいなかったので諦めた。
「やっぱり、屋上だよ。普段鍵がかかっているはずなのにかかってないもん」
　なるほど、言われる通り開いているようだ。
「あー、千華」
「何？」
「お前も放送聞いただろ。多分、この扉にも爆弾が付いていると思うから下で待っててくれ」
「……わかったよ。下で義人君が勝てるように祈ってるよっ」
「そうか、ありがとよ」
　千華の後ろ姿を見送る。適当な事を言ってみたけど、あるわけないだろう。さすがに此処には爆弾なんて付いてないだろうな。だってさ、どう考えてもこの扉を開けるのは学校を占拠した奴らだろうし、絶対につけてないって、うん。

　ドアノブをひねって押してみると本日二度目の派手な音が校内に響き渡った。

第十八話：み：ホラー

第十八話

怖い話は様々な種類がある。それこそ話し手によって変わるし、アレンジの加えられたものは大体聞いていれば数多の話を聞いてきた者たちには大体わかるものだろう。涼しくなる為、ではなく、今回は使い回しの多い件について一言物申したい。

「そんなもの（念仏）聞かないよ」

耳元でささやかれるパターンなら本当の話かどうかも怪しい。そもそも、白い服装に長髪、細い顎をした女が出てきたり、おかっぱ少女が出てくるといった話は怪しすぎる。ショートカットの幽霊が出てくる話なんてほぼ聞かないし、坊主頭の少年だっていいはずだ。兵隊の幽霊が出てくるならそれこそ、原始人の霊が出てきても不思議ではないだろう。

夜中に幽霊の類は出るともいうが、他には夕方と夜の間、逢魔時に出ると言う説もあるのだ。実際、夕方と深夜、どちらに出やすいか試すために作者は隣町のはずれにある自殺者の多いと言われているダムに向かう予定にしている。

この本を書いた作者が行方不明になった、そう帯に書かれていた。行方知れずになって半年以上が経っているらしい……

「全く、ライブに行くまでの時間つぶしに読むもんじゃないな」

適当に本を見繕って買ってみたら失敗だったぜ。今日は怖くて眠れないかも。しかし、ライブ会場に着いてからどうすればいいんだろうなぁ。

俺以外の乗客もどうやらライブが目当ての連中が多いらしい。徹夜組とか居るんだろうか？ともかく、はっぴを着ているところをみると相当なファンらしいな……。

ふと、夕焼けを見る為に電車の外を見ると空を飛んでいる人型の何かが目の前を通り過ぎて行った。他の乗客は誰一人気が付いていない。いちゃついていたり、話しこんでいたりしていたからだ。
あれはなんなんだ。きっと一般人ならそういうだろうな。あの飛び方、電車の中からでも鼻につく血の匂い、黒いマント……はさすがにつけてはいない。
どうやら吸血鬼のようだ。これまで行動を見せなかったのに俺にとって大事なようが出来たら姿を現すなんて本当、ふざけてやがる。
もちろん、俺には二つの選択肢がある。一つはりっこちゃんのお姿を生で見る為に吸血鬼を見なかった事にしてこのまま電車に揺られてライブ会場を目指すことだ。そしてもう一つは俺がこの町にやってきた本当の理由の為に頑張る事、だ。
「……しょーがねぇか」
須黒の奴を誘わなくて（誘えなくて）正解だったな。もし、一緒にいたら何かしらの理由を付ける必要があったからな。ちょっとトイレに行きたくなったとかじゃ通用しないだろうからなぁ。
車両の一番後ろまで移動し、辺りに人がいない事を確認してから窓を突き破って外に出る。そして俺はそのまま先ほどの吸血鬼を追いかける事にした。
力の強い吸血鬼は飛ぶスピードも速い。頭が悪いが力は強いと言ったタイプは例外で能力表を六つに分けたレーダータイプの表で表すなら大体まとまった六角形になる。俺？俺はちょっと小さな六角形かな。
何とか吸血鬼の背中が見えてきたところで既にふらふら……これから襲われたりしたら大変な事になるな。一方的な攻撃、俺はまるでサンドバックのように相手にもてあそばれて終わりだ。まぁ、吸血鬼の中に好戦的なタイプもいれば話し合いで解決できるような奴もいるので一概に俺がぼこぼこにされるわけでもない。
吸血鬼が一人の少女に目を付けたおかげで何とか追いつく事が出来た。そして俺に気が付いていないのか少女から少しだけ離れたと

ころで着地する。もちろん、俺も相手にばれないようなところから追跡を開始する。
相手を仕留めたいのなら気の緩んだ瞬間…つまりは餌にありついているときに背後から襲えばいい。逆に話し合いで解決したいならば襲いかかる前に普通に声をかけることだ。声をかければ狙われている人間も助けられるし、未知数の吸血鬼を前にして食事を取り始めるとは思えない……と、親父は言っていた。
しかし……どこかで見た事があるような後ろ姿だな。白衣なんて着てるし……。
吸血鬼はターゲットの五十メートル近くまで接近している。そして、小走りし始めた。俺もそのあとに続く。まだ、声をかけるには早い。
「須黒さーん」
「……はい？」
吸血鬼に声をかけられた少女は後ろ……つまりはこちらを振り返った。まるでパイナップルみたいな頭をした少女は白衣の吸血鬼を目に入れた後、電柱に隠れていた俺に視界を映して信じられないと言った表情をした。
「須黒さん、今日ライブがあるんでしょ？先生、応援してるから頑張ってきてね」
そして俺は白衣の吸血鬼が誰だかようやく気がついた。俺の担任で、部活の顧問だ。
吸血鬼は玉宮先生だったのだ。

第十九話：ち：深読み

第十九話

吸血鬼が死んだとき、当然ながらＮＫＫの名簿から名前を消される。寿命以外の場合、出来るだけ死因をはっきりさせるために調査員が死に場所に赴くのだ。その後は吸血鬼の研究員に引き渡されて身体をいじくりまわされて家族の元へ送られる。もっとも、火葬されて骨の状態になって帰るそうだ。

現代の吸血鬼は昔の吸血鬼の上に成り立っている。まぁ、これは人間の方もそうなんだろうし、最近の吸血鬼は自分が吸血鬼って言う自覚が足りていないとか何とか。ちなみに、人間に前例のない被害を出した吸血鬼は……

爆発し、俺の衣服は吹っ飛んだ。まぁ、身体が丈夫なだけであって服とかは丈夫じゃないからな。辛うじてパンツがくっついているからいいものを……これが無くなったらモザイクは要るだろ。

手に握っていたドアノブを虚空に投げつける。そのまま星になってしまった。

「貴様、何者だっ」

少々おびえた感じの声だった。そりゃそうだろう。仕掛けていた爆弾が爆発したなら普通の人間はそれは言葉で表現できないような状態になっている。しかし、いざ見てみればモザイク一歩手前で何ともない生徒がいるだけだ。

「いやいや、俺は怪しいものじゃないですよ。この時間帯、いつも屋上にやってきて『青空なんて嫌いだよ、バカ野郎』って言っているただの不良生徒です」

ちなみに今の天気は曇りだ。相手もちらりと上を見て『青空じゃねぇぞ』と目で訴えかけているがそれどころではない。

物騒な代物（おもちゃではないと思う）を俺に向けたまま、相手は口を開いた。
「両手をあげろ」
「もうやってます」
既にあげていたりする。用意のいい男なのである。
「口答えするなっ」
「落ち着いてください。本当にただの生徒なんですよ。ほら、俺の脚を見てください……震えているでしょう？」
相手の視線は俺の不自然に揺れまくっている二つのあんよを見てから納得したようだ。
「じゃあこちらに背中を向けて止まれと言うまで歩いてこい」
言われた通りに相手に背中を向けてから一歩一歩後ずさる。
「止まれ」
「はい」
天に突き上げた二つの手を相手に縛られる。まさかこの歳で縛られるとは夢にも思わなかったな。そろそろ頃合いだろう。
「よしっ」
男はしっかり縛ったつもりなのだろう。何度も何度も確かめてから今度は俺の両足に取り掛かろうとした。
「……ちゃんと縛らないと危ないですよ、おじさん」
ロープを引きちぎって後は一瞬のすきを見せた相手の鼻っ面に素晴らしいストレートをお見舞いする。ちなみに相手が吸血鬼だったらカウンターを喰らうこと間違いなしである。そういえば昨日、決闘方法が変わったとか何とか電話があった気がする。
「さて、ところでこれからどうするか、だよなぁ…」
学校を襲った謎の連中を倒した勇敢なる生徒、俺。
「一人で危ない連中に打ち勝つなんてたくましい！彼女にして！」
「ずるい、あたしのものよっ！」
そんな未来が簡単に予想される。
しかし、潜入調査的な事をしている為に有名になるのは非常にまず

い、ケチャップにマヨネーズ、ナツメグ、鷹の爪、からしを少々入れるぐらいまずい。誰かが連絡したのか校門側からサイレンの音がなっているところをみると屋上での爆発音を間違いなく言われるだろう。

とりあえずのびている男をロープでしっかりと縛り、転落防止用のフェンスにぶら下げておいた。一応、命綱を付けているので安心して欲しい。

「やっぱり逃げないとまずいよなぁ」

中学生のころにこんな事があったのなら間違いなく顔を出して英雄を気取っていた。

さっさと人影の少ない裏庭へと飛び降りて近くの窓から侵入。男子トイレに籠る。

「さて、後は事の成り行きを見守る事にするか」

学校占拠事件は結局頭のおかしい人たちによる犯行だと言う事になった。生徒に被害は出ておらず、俺が気絶させたのが全員。しかし、校舎には結構な傷が残ってしまい屋上は立ち入り禁止、一部破損した壁などにはブルーシートがかけられることとなった。夏休みに入ってから修理するらしい。

たった二日の臨時休校でそれからまた学校。俺と千華は共に登校していた。

「びっくりしたよ。だって屋上に続く階段がいきなり瓦礫で塞がれて、警察官の人たちと一緒に突入したら義人君、いないんだもん」

「飛び降りたんだよ。あそこで俺がいてもまずいだろ」

「え、なんで」

「そりゃ……」

説明するのが面倒だ。千華相手にばれたら面倒だの何だの伝わるかどうかも怪しい。一生懸命説明してもきっとその素敵な脳みそで変な理由に改ざんされるはずである。しかし、最近は大体コツを掴

んできた。
「ヒーローは姿を隠すものだろ」
「それもそうかぁ」
「それよりごめんな、せっかく作ってくれたマント、台無しにしちまって」
爆発に巻き込まれたマントは無事ではなかった。まぁ、それを言ったら他の衣服もそうなんだけどな。
「大丈夫だよ。いくらでも作ってあげるって」
「そうか」
「うん、楽しみにしててね」
てっきり怒られるとばかり思っていたがよかった。でも、変な話だよなぁ……黒幕とかそんなのがいるんじゃないんだろうか。

第十九話：ち：深読み（後書き）

予定話数は３０。つまりあと約１０話分。ちゃんと終わることができるのか、それとも今みたいにぐだぐだで幕を引くのか……次回、偶数話です。

第二十話：み：推理物

第二十話

「…犯人はあなたです、間山寛太さん。あなたは恋人を殺されて憤る若者を演じていたようですが、ストーカーが設置していた監視カメラの前では演じる事が出来ていないようでしたね」

殺人事件が起こってから四日。一度は犯人を間違えて危うく逮捕しそうになった警察は驚いている。

「な、何を根拠にそんな事を……第一、俺にはアリバイがあるじゃないかっ」

「そうだぞ、彼は君と一緒にいたんだろう」

「ええ、確かに一緒にいましたよ……彼は笛を吹くだけでよかった」

「笛？」

「犬笛です。間山さんの飼っている犬は全部で四匹。偶然笛を見つけたあたしがそれを吹いた時に来た犬は三匹……一匹を探したらね、裏庭のところにいたんですよ。何かを探していたんです、それが事件を解決するきっかけでしたよ」

推理小説だけに犯人が存在するとは思えない……いや、冷静に考えてみたら『羽津町吸血鬼事件』だから一応事件っぽい扱いか。

ともかく、だ。俺が先日見たのは紛れもない玉宮菜穂子先生の姿だった。俺が知っている限りでは人間が空を飛ぶことなんて出来ないかもしれない。

「今なら……この屋上から飛べるかもしれない」

なんていう奴がいたら止めておいた方がいい。後に警察と消防、どっちに連絡をいれたらいいかと迷わなくてはいけないはずだ。

率直に『先生がこの吸血鬼事件の犯人なんですね』と問い詰めるのもどうかと思う。何せ日本中に吸血鬼が住んでいるのだ。犯人は

眼鏡をかけて小太りだった……なんてそこらじゅうにいるだろうからな。
というわけで、俺は放課後生物室で電話をかけていた。相手はもちろん、親父である。
幾度かのコール音の後、親父の声が聞こえてきた。
『義人か…犯人を見つけたのか？』
「羽津町に玉宮菜穂子って吸血鬼が住んでいるかどうか調べてほしいんだ」
『……わかった』
寝むそうである。多分、この電話で起きたのだろう。昔の吸血鬼たちは昼間に寝ている。親父はちゃんと地下室にそれっぽい雰囲気を作って（クモの巣を作るキットをこの前購入していた）古臭い棺桶の中で眠っている。まぁ、ここ数十年に生まれた吸血鬼たちは昼にも不通に動ける体制を持っている為に一週間に一度、昼寝をする程度で十分である。
『わかったらこっちからかけなおす』
「親父、頼むぜ」
電話を切ってふと背後に人の気配があったので振り返った。
「……誰と電話してたの」
そこにいたのは須黒美咲。いつものように前髪で顔が隠れ、井戸から出てくれば完璧であろう……夏になったらおばけの役でひと稼ぎできるかもしれない。
「俺の親父だよ」
「…そう」
「なんだか元気ないな」
いつも暗い感じのする少女。最近になってようやく雰囲気がわかるようになってきたからなぁ。この違いは違いの分かる男ではないと気がつかないだろうな。
「昨日、ライブに来てなかったね？」
「ん、ああ用事が出来てな……というか、なんでお前が知ってるん

だ？」
「え？」
「は？」
　お互いに何か勘違いしているようだ。須黒のきょとんとしている顔は新鮮でまだ見たかったけど、そろそろ先生が来る時間帯だろうからな。
「オーケー、お互いにすれ違っている感が否めない。一つ一つ整理していこう、それが心の中に潜むはてなを消す作業だからな」
「……うん」
「よし、じゃあまずはあれだな。なんで俺が昨日行かなかった事を知っているかだ……もしかしてあの場所にいたのか」
　須黒が駅にいて俺を見たのなら行ったと勘違いしただろうな。ライブ会場にいるわけもないな、俺の申し出を断っていたし（実は俺に内緒で行っていたというのならショックである）、万が一にいたとしてもわからないだろうし。
「それは…」
「何か言えない理由があるんだな」
「……もしかして、気付いていないの？」
「何をだ」
「私の事…」
「は？もしかして須黒はライブに行っていたのか」
　正直、ライブに行っておけばよかったと後悔している。朝なんてクラスメートたちの間ですっごく騒がれて『興奮した―』とか『すっげーよかった』とか俺も興奮したかったぜ。
俺はぼーっと窓の外を眺めてからため息をついた。
「そりゃないぜ須黒。俺と一緒に行こうって言ったら用事があるとか何とかかんとか、いやがったじゃないか」
　次の瞬間、俺の頬に鋭い何かが当たった。

「……にぶちん、もういいよ」

何がにぶちんなのか、これはあれだろうか…ヒロインが主人公に恋心を抱いていて勘違いに業を煮やしたってことなんだろうか。

いや、違うな。そんな事は一度もなかったし、何か俺の方が誤解しているようだ。

もうこの話題を須黒の前でしないほうがよさそうだ。俺は話題を変える為に別の話を振る事にした。

「そういえば、昨日先生が真白りっこちゃんと話しているところを見たんだ……うぉっ」

よほど俺の事が気に食わなかったらしい。再び俺の頬を狙った張り手は難なく避けられ空を切る。

「……」

「ど、どうしたんだよ。そんなに怒って…まずは落ち着こうぜ」

「……」

ぷいっとそっぽを向いてそのまま部室から出て行ってしまった。

「……何なんだよ」

女の子ってよくわからないな。

追いかけようかなって思った時にちょうど携帯が鳴り始める。親父からだ。

『義人、調べたぞ』

「あー、どうだった」

俺は気が付いていなかった。自分の背後に一つの影が近づいていた事を。

第二十一話：ち：友達がやってきた

第二十一話

普通の人間を吸血鬼にする方法なんて腐るほどある。ただ、あまり実行する輩は多くない。たとえばある程度血を抜いた人間に吸血鬼の血を輸血していればその人間は吸血鬼になる。リスクの事はとりあえず置いておくとして、晴れて吸血鬼になった人物はそれからある程度試練を乗り越えねばならない。まぁ、あくまで日本の場合である。

ＮＫＫへの登録…これがまた大変で経歴を書いて適性試験（日光に対しての抵抗力など）を受け、吸血鬼の知識を頭に叩き込んだりしなければならない。空を飛ぶこともしなくてはいけないのだ。ま、そういった面倒な事が出来ない吸血鬼には悲惨な道しか残されていないから世の中甘くないなと思うね。

転校してきてもう落ち着いてきた。クラスメートと仲がいいと言わないまでもそれなりに話しが出来るようになってきているし、もう転校生と言うよりもちゃんとした生徒として扱われている気がする。

吸血鬼の捜索も地味に続けていたりして最近では『この町にいないようだ』という結論に近づきつつある。今日も三十分間（最初は一時間近く探していたものだ）

「というわけで、今日は義人君の家に行くよ」

「なにがというわけで、なのかは知らないが……」

「うーん、だって行ったことないし、面白そうだからさ。吸血鬼の家とか見てみたいもん」

おもしろくもないし、特別何があると言うわけではない。しかし、仮にもＮＫＫ理事の息子だからな。『吸血鬼のイメージを壊しては

ならない』をがんばってみようとも思う。いや、普通に高校通っている時点で壊れたとかいっちゃ駄目だぞ。
「んじゃあ、行くか」
「うんっ」
女の子を自分の家……じゃなくてねぐらに連れていける日が来るとは思わなかったな。これもこの町にやって来れた事に感謝だなぁ。女子にモテル男はつらいそうだ、しかし、モテない男の方が辛いのである。
女の子での悩みを相談されたところで答えられない、というか、自慢話だろそれ。
「なぁ、大仁、おれ……三角関係で悩んでるんだ。双子の両方好きになっちまったって言うか…」
「知るかぼけがぁああ」
今日の昼休み、俺は緑川に辞書を投げつけてやった。
ともかく、彼女も女友達もいないやつにそんな相談するんじゃねぇよ、全く。千華と一緒に歩きながらリバーサイド満開を目指す。
「へぇー、リバーサイド満開ってところに住んでるんだね」
「……ああ」
「変な名前だねぇ」
「俺もそう思う」
もし、千華が『すっごいかっこいい名前だね』とかいい始めたら友達やめようかと真剣に考えていたりする。
管理人のおばさんに見つかったら色々と面倒なのでさっさと中へと案内する。
「意外と狭いんだね。もうちょっといい部屋に住んでいるのかって思ってたよ」
自室には色々と調査資料なんかが散乱しているし、足の踏み場がないから辞めておいた方がいいだろう。
「やっぱり棺桶で寝たりするの？」
「この前買い換えたからなぁ……棺桶って言うより木の棺だな。顔

の部分がぱかって開くようなタイプ」
「ふーん、なんだかイメージ崩れるよ」
「……」
この事が親父に知られたらどうなるだろうな。
「で、お茶とコーヒーどっちにする？」
「トマトジュースはあるの？」
「え、ああ…」
これもまたイメージの一環の為に準備されている。とりあえずイメージを保つために赤い飲み物は必然的にトマトジュースしかないからな。小さい頃から親父にのまされてきたから好物の一つだ。
「ほれ」
コップになみなみに注いで自分の分を湯のみの中に入れる。
「……そ、それ…」
「ん、どうした」
信じられないと言った表情、何かは知らないがかなり衝撃を受けているようである。
「ワイングラスは？」
千華がいいたい事等すぐにわかった。
「……あ、ああ…ちょっと今ワイングラスは割れちゃってないんだよ。いつもはワイングラスで飲んでるから安心しろよ」
「そっか、そうだよね」
「そりゃそうだろ…ははは……はぁ」
正直、固定イメージを持たせる原因となった吸血鬼を退治したいと思っている。まぁ、もう死んでいるけどな。
「ところでさ、この町の吸血鬼を捕まえたら義人君はどうするの？」
「どうするのってどういう事だよ」
「そのままの意味だよ。だって、悪い吸血鬼を退治する為に来たんだよね」
「ああ」
「用事がすんだら転校しちゃうのかなぁって思ったの」

「うーん、さぁなぁ」
親父に聞いてみないことにはよくわからないな。人手が足りていないなら俺も手伝わざる負えないだろうけどそうじゃないならこの町に居座る事になるだろう。
「で、どうなの？」
「何とも言えねぇな」
「そっかぁ…」
「どうしてそんな事聞くんだよ」
「そりゃ、義人君とは友達だからだよ。それにあたしの趣味の事を一度も馬鹿にしたことないし、からかったこともない……そして何よりヒーローだからだよ」
「……ヒーロー……ねぇ」
何一つとしてヒーローっぽい事はやってないと思うけどな。放課後やっていた調査もただの聞きこみだし、新たに事件を防いだというわけでもない。
ただまぁ、本人と周りの見解は違うようで千華は俺の両手を握って熱っぽく語るのだった。
「だってさ、だってさ、最初あった時も宙に放り投げられたあたしをキャッチしたし、この前の学校占拠した怪しい人たちを一人で倒しちゃったじゃん」
「うーん、そりゃそうだけどな」
小学生達（装備、海パン一丁）が学校を占拠、それを大人一人（完全武装）が解決するなんて簡単すぎるだろう。
「あたし、大きくなったら義人君を主題として何かお話を考えるよ。そして日曜朝七時くらいから放送するから」
「……そりゃ楽しみだな」
せっかく女の子が一人暮らしの男子生徒の元へとやってきたというのにそんな話ばっかりで時間が過ぎてしまった。千華を背中に乗せて送り届け、充実した（？）一日は過去のものとなったのだった。

第二十二話：み：学園物

第二十二話

『義人、お前の言っていた人物の事だが…』

「親父、こっちからかけなおす。場所がちょっと悪いからさ」

さすがに部室でこれ以上の電話はやばいだろう。さっきだって下手したら須黒に聞かれていた可能性があるのだ。今度は先生がやってくるかもしれないからな。

電話を切って部室から出ようとすると先生と鉢合わせした。

「あら、大仁君…どこに行くの？」

「え、あ、ちょっとだけ用事があって…親父に電話しようかと思って…失礼します」

先生を避けて廊下に出ようとした……が、先生が俺の前に立ちはだかった。それはもう、超える事の出来ない山のごとき威圧感である。

「ごめんねぇ、先生ちょっと聞いちゃいけない事を聞いちゃったみたいでさ」

携帯電話を持っている手の方を握られる。握力は人間のそれとは違い、プレス機に挟まれたかのような力である。リンゴなんて軽く握りつぶす事が出来るに違いない。

抵抗したら俺の手がすりおろしりんごになる事間違いなし。

「せ、先生、どうしたんですか」

「どうもこうも、ちょっと大仁君に見せたいものがあるの。着いてくるわよね」

有無を言わせぬ響きがある。『着いてくるわよね』の短い言葉の中には『着いてこない場合はそれはもう恐ろしい体験をさせてあげるわ』といった意味が含まれているようだ。

相手の考えがわからない以上、従うしかない。いつの時代だって力のあるものが無い者たちを支配してきたのだ。今だって気付かな

いだけで変わりもしない…まぁ、長いものには巻かれろって言葉もあるからな。
「え、ええ…」
「変な事をしようとしたら……」
「しませんよ」
「よろしい」
玉宮先生は俺の首根っこを捕まえると左右にちょっとだけ振った。その動作はまるで缶ジュースの残りを確認するかのようなものだったが、俺からしてみれば首が折れるかどうかの一歩手前だ。もちろん、人間のそれとは強度が違う。戦車の砲台を握って振り回し、それをぶつけられたって大丈夫なぐらい丈夫なんだぜ。でもまぁ、今じゃ気分次第でやられるかもしれない。
「さ、行くわよ」
あろうことか窓から飛び降りた。此処は三階である……といっても、俺と先生は怪我することなく着地で来たわけだけどな。
未だ先生につかまれている俺は校舎裏のシミを見せられる。
「えーと、これは何ですか」
「血で出来たシミよ。もっとも、その血が流れていた吸血鬼はこの世にいないけどね」
「え、そんな馬鹿な…」
吸血鬼の血は日光に当たれば煙を出して消える。日の当らないような場所ならちょっとぐらいなら残るかもしれないがここまで綺麗に人型に残る事はない。
首を掴まれた状態でその血のシミを触ったりしてみた。校舎の壁を触っているだけで、手に違和感は一切ない。
不思議に思う俺に先生は愉快そうに言うのだった。
「……あなたのお父さんから詳しい事は聞けばいいと思うけど、先生は吸血鬼の研究者なの」
「……は」
「私はＮＫＫにいるのが嫌になって今は一人で行動しているわ。こ

うやって世間を騒がせている吸血鬼事件を追ってＮＫＫの派遣員が来る前にその吸血鬼にあれこれするのよ」
　あれこれって何ですかとは聞ける雰囲気ではなかった。下手したらこれからあれこれされるかもしれん。嬉しはずかしなあれこれならともかく…十中八九身体を傷つけるようなあれこれだろうな。
「それでね、それまで吸血鬼が起こしていた事件を先生が続けてＮＫＫの派遣員をおびき寄せるのよ」
「……」
　この場合、おびき寄せられた派遣員って一体誰の事になるんだろう…なんて言えたらどれほど良かっただろうか。
　暴れた瞬間に先生は俺の首をちょっとだけひねるだろう。情け容赦のない冷徹な雰囲気がいつもの優しそうな雰囲気とのギャップの激しさで俺の脳天はしびれまくりである…すまん、自分で何言っているのかよくわかってないぞ。
「…えーと、つまり先生は俺の身体を使って実験しようってことですか」
「よくできました、その通りよ」
「……」
　絶望的である。こういうピンチの時に誰かが助けに来てくれるんじゃないんだろうか。淡い期待を寄せて眼だけ動かしてみたけど、どこにもヒーローはいない。
　しかし、俺が可哀想なモルモットになる事もなかった。
「残念ながら大仁君は平均より少し下のレベルだから使い物にならないわね」
「え…」
「先生が必要としているのはとても能力の高い吸血鬼なのよ。耐久度も高くないといけないんだけど、最近の子はやっぱり身体的にも弱くなってきているみたいだし、駄目ね」
　助かった…何だか嬉しくないけどな。取るに足らない相手だから見逃してくれると言う事だろうか。

「見逃してくれるんですか」
「うーん、そうね…大仁君がＮＫＫに報告しないのなら見逃してあげる」
「…本当ですか？」
俺の質問に対して先生は頷く。
「本当よ。だってここで大仁君がＮＫＫに連絡しなかったら手に負えない大物が派遣されるに違いないもの」
そんな怖い人物がいるのかよ…知らないなぁ。
「ともかく、大仁君が変な事をしなければ私も襲ったりしないわ」
先生は俺を解放してくれた。もっとも、強大な力を持つ吸血鬼が近くにいる事実に変わりはない。俺程度の吸血鬼なんて瞬きの間に大変な事になる可能性が高いのだ。ほら、あれだ。お猿さんが手の上に小便引っ掛けるような話みたいなもんだな。
「ああ、そうそう」
さっさと逃げ出したい俺にまだ用事があるらしい。
「ＮＫＫには残念なお知らせだけど今回私が追いかけている吸血鬼は二人いたのよ。一匹はこの通り、平らな姿になったけどね」
指差す先には血のシミが……俺も下手したらああなるんだろうな。
「つまり、もう一人はまだこの町にいるって事ですか」
「多分そうね。まだ匂いをかすかに感じるもの。もちろん、私の手足となって大仁君には働いてもらうわ」
嫌だなんて言ったら頭の中に電極埋め込まれて操られそうである。

『勇気を持ってＮＯと言おう』

学校の掲示板かどこかで見た言葉だ。言えるほどの力を持っていない自分が悲しい。でもまぁ、考えようによっては強力な助っ人を得たようなものだから調査は捗るってことなんだろうか。

「じゃ、明日から須黒さんと協力して吸血鬼捜索してもらうわ」
「え…」
「大丈夫、吸血鬼の事に関しての部活だからなんらおかしな問題点はないもの」
そういえばそうだったなぁとため息をつけるほど心に余裕はなかったりする。

第二十二話：み：学園物（後書き）

冒頭、ちょっとした小話を書こうとして気がつきました。これは本編よりも長くなりすぎているぞ…。結果、削除。この作品自体が学園物みたいなものだから今回はいいかなぁということで冒頭はありません。前書きに書いていないのは読むまでに一ページ分増えますからね。面倒でしょうし、あとがきなんて滅多にないから誰も読んでいないという理由からです。さて、奇数のほうもそれなりに話が進みます。

第二十三話：ち：二人の仲を裂くもの

第二十三話

吸血鬼って一体何だろうかと思った事がある。人間の進化した姿なのか、それとも人間とは別に進化してきたものなのか考えた事があるのだ。それらの質問はＮＫＫの研究者にぶつけてみた……まぁ、新たな問題提唱したおかげで会議は俺の質問のせいでつぶれ、色々と問題になった。結局、亜人間的立ち位置で一旦落ち着いたそうだ。

それならこの世界に狼人間とかいてもいいんじゃないかと思うんだけどまだ見かけたことはない。

「狼女の彼女が欲しいな」

なんて事を親父がいっていたのを思い出したぜ。

千華に『狼男の知り合いはいないのか』なんて言われたからちょっとだけ笑ってしまった。

「居るわけないだろ」

「えー、それって不公平だよ。だって、吸血鬼はいるんだよ？」

「いや、うーん、なんて言うんだろう。でもさ、冷静に考えたら満月を見て狼になるなんて絶対におかしい」

校舎裏にわざわざ呼ばれたからこれは告白される素晴らしいシチュエーションじゃないだろうかと考えた自分が浅はかだったな。なんで俺は狼男の話なんてしてるんだ。

「んで、俺を呼び出した理由はなんだよ」

「あ、忘れてた……これだよ、これ」

未だ校舎の傷は癒えていない。凹んでいるところはブルーシートで覆っていたり、一部の階段が使用不可。屋上にいたっては瓦礫が撤去されてから雨漏り防止のために早速工事が行われている為立ち入り禁止となっている。

そして、校舎の裏にもブルーシートがかけられている場所があった。

「ここがどうかしたのか？この前の事件のせいだろ」
「ううん、ここは違うんだよ」
千華はブルーシートを剥がし始める。
「おいおい、いいのかよ」
「大丈夫だよ、壊れているとかそういうのじゃないから。大体、あたしがしたんだから」
ブルーシートがめくられるとそこには人型の不気味な赤いしみがあった。
「……なんだ、学校の七不思議みたいなものか……高校にもあるんだな。で、これがどうしたんだよ。吸血鬼がいるなら七不思議も現実に起こりうるとかそういうのじゃ…」
「そうじゃないよ。義人君なら冷静にこの血が何の血なのかわかるかなって思ったんだよ」
吸血鬼と言えど風雨にさらされている血を舐めたいとは思わないなぁ……。
「もうちょいで夏休みだな」
「うん、そうだね、さ、はやく。じめじめしてるから早くなめないと味がなくなっちゃうよ」
味とか残ってるのかよ。
はぁ…最近、千華は俺の事を警察犬か何かと勘違いしているんじゃないかって思うんだよなぁ…。女子のブルマ盗んだ犯人を探しだすのに俺の嗅覚を使ったり、ひったくりを捕まえるように俺に指示したりして……。
「さ、早く」
「…わかったよ」
ちょっとだけ壁を抉る。そこで違和感を感じた。抉った壁の中も真っ赤なのだ……血が壁に浸透するなんてありえるんだろうか。
ともかく、血を舐めてみる事にした。
「で、どうかな」
一言目にまずいといいたい。一度舐めたら絶対に忘れないあの味

がした。
「……こりゃ吸血鬼の血の味がするなぁ…基本的に日に当たれば血が無くなっちまうんだが…日当たりが悪いから残っていたって言うのにもちょっとおかしな点はあるし…血液量からするとどうもこの血の持ち主は死んでるようだな…千華はこのシミいつ見つけたんだ」
「うーん、一週間ぐらい前かなぁ」
「一週間か…なんですぐに俺に教えてくれなかったんだよ」
「だって、義人君『テストがやばくて遊んでなんかいられない』って言ってたじゃんっ」
「あ、あー、そうだったか」
吸血鬼と言えど、テストは重要である。だって、赤点とかとったら夏休みにたくさん補習とか入っちゃうんだぜ。
「ともかく、俺が追っていた吸血鬼のものって考えてもおかしくない……ってわけにはいかないな」
何より日が当って消えない血なら何かしら意味があるはずだ。
「この血の事は専門業者に頼んで調べておいてもらうよ」
「じゃあ今日の調査は終わりだね」
「そうだな。そろそろ帰るか」
明日の朝『昨日青木さんに告白されてたね』とか言われたら目も当てられない。二人で壁の血を眺め、あまつさえ片方はそれを舐めるとかどうかしていると思われるだろう。
「ねぇ、義人君」
「なんだ」
「この後あたしの家に来ない？」
「ん、ああ…別にかまわないぞ」
「そっか、じゃあ決まりだね」
以前行ったときは何やら妙な事が起こっていたからな。家族全員がかちゃかちゃやっていて少し怖かった。
こうして俺は再び青木家に向かう事にしたのだった。

下校中に特にこれと言って面白い事は起きなかった。甘酸っぱい青春ラブコメ的な（突如として俺の事を好きになった美少女がラブレターを渡しにやってくるも、その光景をみた千華が怒ってなだめようとした俺とけんかになってすれ違いイベント的なそんな感じ）展開も起きず、謎の侵略者が沸いて出てくることもない。

「そうそう非日常的な事は起きないんだな」

「うーん、あたしから見たらこうやって吸血鬼と一緒に歩いて帰っていること自体がちょっと自慢できるような事だけど。あ、でも日常的な事だからやっぱり非日常的なことなんて起きないよね」

当たり障りのないような会話でそのまま千華の家までやってきた。

「ただいまー」

「お邪魔します」

居間では青木家の面々が人生ゲームに興じていた。

「あちゃー、借金地獄だ」

「株価が暴落したぁ」

「スタートに戻されたわ」

「ぼ、牧場行きじゃと…」

帰って来た娘の事にも気が付いていないようである。千華はため息をついて俺の方を見た。

「気にしなくていいよ」

「そ、そうか」

真剣そのもの、その目は何かを捕らえるようにルーレットを回し始める。それが止まる前に千華は俺に言うのだった。

「部屋で待ってて」

「わかった」

女の子の部屋に一人で入っていいものかと思いつつ、千華の部屋にある戦隊物のポスターを思い出してそんな事を考えた自分が恥ずかしくなった。

「相変わらずすごいな」

遊園地のヒーローショーで手に入るようなサインが数枚飾られているのは相変わらずだ。ふと、机の上を見ると緑川に撮ってもらった俺とのツーショットが置いてあった。地味に嬉しい。
近くに置いてあったヒーロー年鑑を拾い上げてめくる。そういえば小さい頃は俺も欠かさず見ていたものだな。今じゃ、怪人役の人は大変なんだろうなぁ…といった同情の眼差しで見てるけどな。
数ページめくったところで扉の開く音がした。
「千華……って由香ちゃんか」
「こんにちは」
あまり話した事のない少女だ。初対面で俺のベルトを触ってくるようなところをみるとこの子も姉に感化されている可哀想な少女の一人かもしれない。
しかしまぁ、今日はどうかしたのだろうか。そのあどけない顔に何かしら決意したような色をにじませている。
近くまで歩いてくると何故かあぐらしている俺の上にのったのだ。髪から漂ってくる匂いがいい匂いでグッジョブである。
「ん、どうかしたのかな」
俺が幼子好きだったら今頃この子は大変な目に会っていただろうな。まぁ、アイドルのりっこちゃんが好きとかそういう時点で変な目で見られるしなぁ……そういえばりっこちゃんがアイドルやめちゃうかもしれないとか噂が…
横道にそれ始めた俺の耳に由香ちゃんの鈴の鳴るような声が届く。
「あの、吸血鬼なんですよね。だったら私を吸血鬼にしてください」
すごくショックを受けた。どのくらいショックを受けたかと言うと百点と信じて疑わなかったテストの問題が一つずつずれている事

にラスト二分で気がついたときみたいだな。あれが小テストでなければ今頃俺はどんな目に会っていた事だろうか。
「由香ちゃん、ちょっと落ち着こうか。君は今ほんのちょっと、そう、微々たるものだけど錯乱しているんだ」
「私は普通です、真剣なんです…さ、どうぞ」
そう言うと上着のボタンを外し始めた。首筋の白さが…なんだろうか、吸血鬼としての『噛みたい』とかそんな欲望をかきたててくるのだ。いや、しかし、友人の妹だし…。
「ごめーん、ちょっと遅くな……った」
がちゃっと扉が開いて元気よく千華が入ってきた…のはよかった。ただ、千華から見たら俺が妹の上着を脱がせて、妹は何やら必死に目をつぶっているような状況である。
「……何、してるの」
先ほどの元気はどこへやら、代わりに親の仇でも見つけたような声を出し始めた。俺は生まれて初めて、ただの人間が恐ろしく見えた。
「か、勘違いしてるだけだって。まだ何もしてねぇよっ」
「……へぇ、まだ何もしてないんだぁ…これから、どうするの」
「どうもしないって」
やばい、やばいぞ…下手な事をいったら泥沼に陥りそうだ。
そんな時、由香ちゃんは立ち上がると上着のボタンを止めて部屋を出て行こうとした。
「あ、ちょっと由香」
「……義人さん、続きは今度やりましょう」
ほらまた、そういった変な勘違いを残して行っちゃうとか本当、俺が何か悪いことしたんだろうか。
やはりというか、その言葉が止めの一撃となって俺はすぐさま青木家から叩きだされた。ほっぺに手形と言うお土産までもらえた。
「……こんなすれ違いとか嫌だぜ、本当」
神様なんていないんだな…そういう事を改めて思い知らされた。

しかし、どうして由香ちゃんは俺が吸血鬼だって言う事を知ったんだろうか…まぁ、どうせ千華が口を滑らせただけなんだろうけどさ。

第二十四話：み：昔話

第二十四話

昔々あるところにおじいさんとおばあさんがおったそうな。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川に洗濯にいつものように向かうとある日、河の上流から吸血鬼が流れて来たそうな。

「こりゃ大変じゃあ」

おばあさんは……あー、駄目だ。

「俺に文才はねぇよ」

「……うん」

そんな率直に言ってくれるなよ。ちょっとぐらいは『そんなことはないよ、義人君の文章は味があって私は好きだな』とか気のきくような……まぁ、もういいけどよ。

なんでこんなことになったかと言うと信じられないことに吸血鬼捜索を続けていたら幼稚園の先生がみたとか何とか。なんでそんな事を聞いてくるのかと言われて俺がとっさに『実は高校の部活で吸血鬼を題材とした創作昔話を作ってまして…なんちゃら』といった感じである。創作昔話の時点で怪しい匂いがぷんぷんしているはずだ。

でもまぁ、先生の人柄がよかったのかあっさり納得してくれてあまつさえ『では出来上がったら子供たちに聞かせてあげてくださいね』と言ってくれた。

「…あのとき、新聞部です。事件が最近起こっていないので調査しているんですって言えばよかったんじゃないかな」

「あー、そうだな。後から考えたら俺もその答えにたどりついたよ」

これまではただ漠然と『吸血鬼はこの町にもういないんだなぁ』って思っていたけど、先生が吸血鬼で、さらにもう一人吸血鬼がい

るとか変な状況になっているのだ。それに先生は俺の事を手足のように扱っているし、嫌だとか言ったらひどい目にあいそうである。既にあっているとかは秘密だ。
「…私が考えようか」
「うーん、いや、俺が引き受けたようなものだから須黒には出来た話を読んでもらう事にする」
須黒に頼んだらおどろおどろしい話が出来上がって子供たちがちびりそうだ。何せ、あそこの園児達が須黒を見て震えあがっていたからな。
「…でも、事件の犯人も探さないといけないんでしょ」
「そうなんだよなぁ…ともかく、吸血鬼の話の方は少しの間だけ保留って事で何か手掛かりになるようなものでいいから探すってことでどうだ」
「…うん」
二兎追うものはなんとやらだ。
生物室のテレビを付けてニュースでも見ることにした。先生はどうせいないし、この近くの廊下を通るわけでもないだろう。
須黒に何かの話を振っても最近はなんとなく溝があるからな。用事が無いと話しづらいんだよ。
『本当に残念ですね。真白りっこさんがアイドルをおやめになるとは』
「嘘…」
テレビの右上の画像はりっこちゃんそのもの。テロップには『衝撃の引退』と銘打たれていた。
『前々から噂になっていましたけどこの前のライブが本人にとっていまいちのものだったようですね。出す曲自体は売れていたようですが、本人を満足させる出来ではなかったというのが所属する事務所の見解です。』
「か、会見とか一切なく…ＦＡＸで引退とか何があったんだ…」
な、何か変な追っかけのせいで苦しんで辞めたとかそんな理由な

ら俺が排除してくれる。一体、どこのどいつがりっこちゃんをここまで追い込んだんだ。
「す、須黒…お前、知ってたか」
「……うん」
普段より少しだけ長い間。しかし、今はそんなことどうでもいい。この前のライブは絶対に見に行くべきだった。
「最近ついてないぜ。先生には面倒なこと押しつけられるし、仕事が終わったと思ったらぬか喜びだったし、挙句りっこちゃんがアイドルをやめてしまうとは…」
「……やっぱり、やめたらまずかったかな」
「そりゃまぁ、そうだけどな。でもりっこちゃんにも何かしらの理由があるんだろ。誰にだって理由はあるからしょうがない」
「義人君はまた新しいアイドルを応援するの？」
須黒の質問に俺はすぐさま首を振った。
「そりゃないな。こっちにも色々とあってだな。えーと、己のフィーリングと言うかなんと説明したらいいか……ともかく、りっこちゃんのような子はなかなか出てこないだろうしな」
吸血鬼の心を揺さぶられるようなアイドルは今のところりっこちゃん以外にいないのでどうしたもんだろうな。
俺の言葉をどうとったのか知らないし、あまり意味もないだろうけど須黒は嬉しそうだった。
「……そっか、そうなんだ」
大体俺はミーハーじゃないからな。テレビに出るようになってファンになった～とか反吐が出るぜ。あと無駄に多いのは必要ないだろ。人気が出て後でばら売りとかよくあることだけど残念な話だ。
「…あのさ、義人君」
「なんだ」
「今度の土曜日、此処にきて」
手渡された紙には住所が書かれているだけだった。
「土曜日か…」

「…うん、絶対」
「わかったよ」
須黒が自己主張するなんて珍しいもんだ。休日も出来れば探してほしいと言われているけど、先生自体すぐさま発見できるとは思っていないようだからたまにはいいかな。

第二十四話：み：昔話（後書き）

奇数、偶数に分けたことを後悔しています。これならまとめてやって後から別としてやればよかった。最近は恐ろしいもので適当にケータイで写真を撮ろうとしたら盗撮疑惑をもたれて大変ですね。すっごくふとった方がいきなり腕をつかんできて『今、私のこと盗撮したでしょ、したでしょっ』ってそんなことになったら恐ろしいのなんの…これだけで何か話ができるほど、面白い話題ではありますけど。さて、終盤が近付いてきていますが、大仁義人はどういった結末をむかえるんでしょうか今更ながらタイトル名を適当につけたのも悔やまれます。『おひとよし』ってあだ名はさすがに言いづらいですねぇ。

第二十五話：ち：人と吸血鬼のすれ違い

第二十五話

吸血鬼は基本的に人間の事を餌としか見ていない……といった考えもある。まぁ、前にもふれたけどそういった考えが大半だろうな。それもいいだろうが、中には感謝している連中もいる。人間がいなければ滅んでしまうからな。何がいいたいかって？いや、別に何でもない。

千華が俺の事をまるで虫けらでも見るかのような感じで三日が経った。三日目、席替えがあったのだ。くじを引いて番号順に並び変えってやつだ。何とかこれでしのげるかと思ったのだが、まさかの展開になった。

「…ふんっ」

「…」

まさかの隣、隣ですよ奥様っ。確率的にすっごく低いはずなのに誰かの思惑よろしく隣に来るとは思わなかった。

まぁ、みんなもそう思うだろう。そして、緑川が何やらニヤニヤしてやがった。

「よかったなぁ、手を出した妹さんのお姉さんが隣に来てさ。色々とやりやすくなったんじゃないの？」

「……お前、もしかしてくじに何か細工したのか？」

「ああ」

「てめぇ…」

「おっと、気付けないやつが悪いんだぜ。なーに、どうせ青木の勘違いでそんな状況に陥ったんだろ？それならおれに任せろよ」

中途半端に話を知っているようだ……と思ったらそうでもないらしい。俺の肩に手をまわして顔を近づけてくる。

「で、具体的にどんなことが起こったんだよ？」

「えーっとだな」

吸血鬼の話の事だけは伏せておいてそれ以外はありのままに話した。妹がいきなり俺のひざの上に乗ってきて、上着を脱ぎ、そこを千華に目撃されたのだと。
「うん、なるほどな」
「どうにかなるのかよ」
「ああ、ばっちりだ。成功しなかったらおれのとっておきをお前にやってほしい」
「……ほほぅ、よほど自信があるようだな」
「もちろんだ。その代わり成功したら何かおれにくれよ」
「いいだろう、俺のとっておきをくれてやる」
「で、それはなんだ？」
「……そうだな、どうせ失敗するだろうからりっこちゃんのデビュー当時の写真集でどうだ」
「よし、これは頑張りがいがありそうだな」
こいつがこれほど頑張ってくれるのは珍しい気がするな。期末とかもいまいち頑張っている感じがしなかったし……まぁ、当然だな。何せ今では手に入れようとしたら相当な額を要求されるからなぁ。
タイミング、計画等は全部まかせっきりにして次の授業が始まるまでりっこちゃんの話で盛り上がった。そして、チャイムがなって緑川が戻って行き、先生が来るまでのほんのちょっとの間になんと、千華が話しかけてきた。
「ねぇ、義人君」
「ん、な、何だ」
「……アイドルの追っかけとか気持ち悪いよ」
「……」
これはぐさっときた。いや、それ以上だ。プロが小学生に対して野球ならピッチャー返し、剣道なら突き、柔道なら掴まず放り投げるみたいなそんな感じだ。
次の授業は放心状態で受けた。りっこちゃんのことを全否定されたような、そして俺の事を全否定されたような絶望感。冗談抜きに

脳内をぶん殴られたような気持ちでそのまま昼休み、午後の授業へと移行。ご飯も喉に通らなかったりする。
「おい、大仁、大仁…」
「え、はい」
「ここの問題を解いてみろ」
「えーっと…」
「教科書が逆さまだぞ」
「え、あ…」
授業中にあてられてもこんな反応。クラス中で軽く笑われて授業は普通に進む……でも、俺の心は午前中に千華に言われた言葉のところで止まっていたりする。
放課後になってある程度は回復したが、既に千華は教室にいなかった。
「……はぁ」
「お困りのようだな」
「ああ」
「よし、じゃあもう少ししたら青木をこの教室に呼び出すからお前は男子トイレで待機しておいてくれ。携帯持ってきてるだろ？」
「ああ」
吹き飛んだ男子トイレは未だに立ち入り禁止状態ではあるため、同じ階の男性職員用のトイレを使用可能である。
そこで待機すること三十分。俺の携帯が鳴りだした。
『お膳立ては全てしてやった。後は勢いよく教室の後ろ扉を開けて床にある印一歩手前で綺麗に止まれ……いいか、勢いを付けて行くんだぞ？』
「わかった」
『この計画の一番重要な部分だ。もう一度いうのはそれが大変必要な事だからだぞ……いいか、後ろの扉から勢いよくはいって床に印があるところで止まるんだぞ』
「わかったよ」

『じゃ、がんばれよ』
何故勢いよく入らなければいけないのかわからない、しかしまぁ、必要なことなのだろう。千華に気がつかれない様に教室前までやってくると勢いよく扉を開け、そのまま突っ込んだ。
「！？」
千華は驚いたような顔をしている。そりゃ当然か。俺は緑川の言うとおり床にあった印一歩手前で止まろうとして、止まれなかった。簡単に言うなら印のところに何か滑るような液体がまかれていたのだ。
「うわっ」
そのまま千華を押し倒して大変なことになった……いや、そんなことはどうでもいい。それより大変なことになっているのは間違いない。

千華は俺の事を心の底から汚物でも見るかのような目で見ていたのだ。

「義人君、女の子なら誰でもいいんだね」
「ち、ちが……」
この状況で『違うんだ』でまかり通る事等不可能だろう。同じようなイベントを体験してきた連中は俺の事を責めることなど出来ないはずである。
「最低っ、大嫌いっ」
金的にひざ蹴りされて悶える俺。千華は走って教室から出て行ってしまった。
「ありゃ、失敗だったか―」

そして掃除用具入れから緑川が出てきた。正直、生まれて初めて他人に殺意を覚えたかもしれない。何を期待していたのかビデオカメラが握られている。
「て、てめぇ、よけいこじれちまったじゃねぇかっ」
「これで終わったんなら手っ取り早かったんだけどな。うまくいかないもんだな」
「お前、他人事だからって……」
「おいおい、俺の方はとっておきがかかってるんだよ。他人事じゃねぇ。つーわけで、最後の仕上げだな」
「仕上げって…」
「何、お前は家に帰ってデビュー当時の写真集を俺に渡す準備をしておくんだな」
緑川の言葉を聞きながら何とか内また気味に立ち上がる。親父はよく女性に金的攻撃されていたそうだ……自慢するように言っているなんて今更ながらバカだと思う。
「じゃあまた明日な…しっかし、いい絵が撮れたもんだ」
あいつが男じゃなかったのなら間違いなく襲って血を吸っていた事だろう。誰かにイライラをぶつけたいが、そんなことしたら大変なことになるだろうな。
お股が大変なことになってないか確認する勇気もなく、お茶を入れて一息ついていた。
「はぁ……」
やっぱり素直に謝って…それこそ、土下座してでも許してもらうべきなんだろうか。でも、俺は別に悪いことしてないんだけどなぁ。うーん、しかし、とりあえずは頭を下げてこの場を丸く収めたほうがいい気がする。うん、そうしよう。明日は朝一で千華の家の前で待機している事にしよう。
俺の中で堅い決意が出来上がった時、携帯電話が鳴りだした。
サブディスプレイを見てげんなりする。
「……緑川か」

嫌な予感がするものの、無視するわけにもいかないだろう。
「もしもし」
『ふふふ、あはははは、あーはっはっ』
急いで電話を切った。いきなり三段可変式叫びをしてくるようなアホの友達なんていない。きっといたずら電話だったか、俺の幻聴だ。
そして再びコール音。相手を確認したあとため息をついた。
「もしもし」
『何切ってるんだよ』
「そりゃ誰だって切るだろ」
『ともかく、俺の勝ちだ。明日の朝ちゃんと持ってこいよ。くくく…じゃあな』
それだけ言って電話は切れる。メールでよかっただろ、別に。
恨み事の一つでも言ってやろうかとリダイヤルしようかと思った時にチャイムが鳴り響いた。
「あ、はーい」
そういえば管理人のおばちゃんが来るとか何とか言ってたっけ。ともかく出たほうがよさそうだな。
いい感じに錆びの音を響かせて扉が開く。そこには肩で息をしている千華の姿があった。
「ち、千華……」
「はぁ…はぁ、ご、ごめんね何だかあたし、すっごく勘違いしてたみたいでさ…」
「そ、そうか…とりあえずあがれよ。お茶ぐらいなら出すからさ」
「ありがと」
千華を部屋に通してお茶を出す。それを一気に飲み干して一息ついたようだった。肩を露出させた服装の為、汗ばんだ肩、首筋の方へとついつい視線がいってしまう。
「あのさ」
「え」

慌てて千華の顔を見る。すると千華は本当に恥ずかしそうだった。
「勘違いしちゃって……ごめんね、義人君があんなことするわけないもんね」
「え、ああ」
「由香からちゃんと話聞いたからさ。本当、変な事を頼んだみたいで……それに、学校で義人君にひどいこと言っちゃったし」
「もう気にしてねぇよ」
本当は滅茶苦茶気にしてるけどな。男の見栄ってもんだよ。
「そっか、よかった…」
「あ、ああ。よかったぜ」
何だか嫌な空気だ。嫌って言うか、居づらい雰囲気。
「あたしね、なんだか急に義人君が遠い存在だったのを知った気分になっちゃってどうすればいいのか全然わからなくなったんだ」
「は？」
千華は顔を伏せた。透明な液体が床に堕ちて行くのがちらっと見えて俺の心が不安定になって行くのを感じた。
「言葉じゃ説明しづらいかな。あたし、国語苦手じゃないけど言葉に出来ない。うん、義人君は吸血鬼だけど、すごく近くにいて本当に親友だった。そうだったけど、急に義人君が何考えているのかわからなくなってて…そこにアイドルの話で盛り上がるとか本当に信じられなくて……」
千華はゆっくりと顔を上げる。悲壮さはなかった、怒っているようでもなくて、笑っていた。
「やっぱり、義人君が悪いっ」
「ええっ？わけわかんねぇよっ」
「女の子を勘違いさせちゃったんだから義人君が悪いっ」
「……なんだよそれ」
へ理屈だ……と、思いつつも丸く収まったようでほっとする。ため息をついた俺の右手を持って自分の胸の中央へとくっつけた。鋼の心臓と誉れだかき俺の心臓は徐々に鼓動が速くなる。

「あたし、勘違いしちゃったから……たとえ義人君が吸血鬼を見つけて事件を解決していなくなっちゃうとしても全力で協力するよ。うん、何かあったらあたしに相談してね。絶対だよ？」
「お、おう…」
他人がいなくて本当に良かった。こんなところ見られたら恥ずかしくてどうにかなっちまうよ。さっきから心臓はばくばく鳴り響いているし、何か病気になっちまったんじゃなかろうか？
いつもよりテンションの高い千華は『このまま居たら義人君をどうにかしちゃいそうだから帰るよ』といって早々に帰って行った。
改めてやる気が出てきた気がする。どんな事があってもこの町に巣食う吸血鬼がいるのなら絶対に、締め出してやろうと俺は心に誓ったのだった。

「義人、本をよこせ」
「ほらよ」
「珍しいな……お前がこうもお宝をほいほい渡すとはよ。渋るかと思ったぜ」
「ああ、俺にはもう要らないんだよ。りっこちゃんはもう過去の人だ」
「そっか、そりゃあ……よかったな」
「ああ」
「ま、俺の計画は正しかったわけだが……この本を貸してやろう」
「いいのかよ？」
「ああ、お前もわかる奴だからな。いいものはちゃんと知っておいた方がいい」
緑川から借りた本は俺が読む前に千華がにこにこしながら燃やしてしまった。この貴重な本への多額の出費と、頬に残る強烈な手形

が事件のまとめとなった。

第二十六話：み：悪者

第二十六話

世界征服をたくらむ悪の組織『じんじゃうぇーる』。戦闘員たちは食卓にのぼる食塩を砂糖に変えると言った悪逆非道の限りを尽くしていた。

怪人は戦闘員たちにどんどん指示を送り続ける。

「さぁ、さぁ、世界を混沌の渦に陥れるのだ」

「まてーい」

この世はもう破滅だ……誰もがそう思っていた時に人類存亡の一筋の光が道を照らす。

「貴様のような変な名前の悪の組織なんぞ不要だ。世界は我ら、『日本籠手臭愛好会』がもらいうける」

第二の世界征服をたくらむ組織が出てきたのだった。

「まてまてまてーい…」

そして、その後も我こそは覇道を唱えるものなり～といった感じでたくさんの悪の組織が出てきたのだった。

結果はいわずもがな…最終的には潰しあって世界は平和になったのだった。

「先生、どうかこのお金で一つお願いします…」

「おうおう、まかせぇまかせぇ」

まぁ、小悪党の方は破滅したりはしない。

今ではあまり話さなくなった青木千華から借りた本はどうも俺には合わないようだった。さっぱり面白さが伝わってこないだろう……きっと、この粗筋を見たところで誰も続きを読もうとは思わないし、作者の努力が微塵も感じられないのだ。とりあえず書きました……一度あってぶん殴ってやりたいな。

そろそろ須黒との待ち合わせの時間だ。しかし、住所通りの場所に来たものの廃工場だ。まぁ、この廃工場の事はとっくに調査済みで吸血鬼が来た痕跡は見当たらなかったし、玉宮先生だってこの場所に来て独自に調べていたそうだから大丈夫だろう。

ではなぜ須黒はこんな人目につきそうにない場所に俺を呼んだのだろうか。須黒自体が吸血鬼で事件を起こしていたと考えるべきか……いや、それはないか。それが違うと言うのなら何が理由としてあげられるだろう。

「うん、駄目だな」

これ以上は特に思い浮かばない。本命で俺の正体がばれたってやつかもしれないな。

「…義人君」

「お、やっときたか…」

そこにいたのは須黒美咲ではなく、僕らのアイドル真白りっこちゃんだった。なんで間違えてしまったんだろうか。須黒の声になんとなーく（須黒は慣れないと聞いていて不安になるような声がするのだ）似ているとは思ったけど違うしなぁ。

「お、おお…生りっこちゃんだ」

まさか須黒はりっこちゃんと知り合い…いや、それより仲のいい友達や親友、はたまた親戚だったりするのかもしれない。いや、今は須黒のことなんてどうでもいい。

「握手してください、サインください、俺と一緒に写真に写ってくださいっ」

直角のお辞儀、そしてそれから徐々に頭を下げて行き懇願。もしも往来でりっこちゃんが靴を舐めろと言ってきても俺はそれを断る術を知らないんだ。

ちょっとやばい目つきをしているであろう俺を見てりっこちゃんは若干引いているようだった。

「え、えーっと、本当に気が付いてないのかな？」

「何が？」

「えーっと、ほら」
りっこちゃんの代名詞でもあるパイナップル頭を止めている紐が解き放たれた。豊富な髪の毛はそのまま落ちて行き……そこにいたのは学校で『白いワンピが怖いくらい似合う少女ナンバーワン』の須黒美咲だった。
「あれ、りっこちゃんが消えたぞ？どこに行っちゃったんだ……須黒、知らないか？」
「……はぁ」
「おーい、りっこちゃーん……は、もしかしてりっこちゃんは瞬間移動の持ち主で須黒と素早く入れ変わったとか……はたまた異次元空間に逃亡……」
少し錯乱し始めた俺の頬に鋭い張り手が飛んできた。
「いたっ、何するんだよ」
「……落ち着いてよく聞いてよ」
「なんだよ」
「…私はね、真白りっこなの」
実は世界に滅亡の危機が迫ってます。あ、ちなみにそれは明日の早朝なんでよろしく。そう言われるよりもすごく驚いた気がした。
「はは、何を冗談を……」
「じゃあ黙って座ってて」
「？」
今から何をするんだろうかと俺はその場に正座してしまった。少し汚れてしまうがしょうがない。
須黒はおもむろにマイクを取り出すと歌い始めた。
「こ、この曲は…」
りっこちゃんがデビュー当時に一度だけ歌ったものだった。最近ファンになったようなにわかが知っているようなものではない、何せ路上で偶然歌ったものだからな。
「…これで信用してもらえたかな」
「うーむ…まさか須黒が熱烈なりっこちゃんファンだったとは…」

「……駄目だね、全然信用してくれない……」
須黒は何やら困っているようだ。何を困っているのか知らない……知らないけど、須黒とりっこちゃんの話で盛り上がれそうだと言う事はわかっている。
再び須黒は髪の毛をまとめるとりっこちゃんが出てきた。
「あ、りっこちゃん」
「……大仁義人君っ」
「はいっ」
「私は須黒美咲なのっ。わかった？」
「わかりました！」
「本当にわかったのかなぁ……」
再び須黒に戻る。
「…私がりっこだって認めてくれた？」
「そりゃもう、りっこちゃんに言われたら頷くしかないからな。まさか須黒がりっこちゃんだったとは驚きだ」
俺の嬉々とした言葉に須黒は悲しそうにため息をついたのだった。
「……逆だよ、真白りっこが須黒美咲だったの。親が無理やりやって、それが大当たりするとは思わなくて……」
「そーなのか」
一呼吸置いて須黒は口を開いた。
「…幻滅したでしょ？盲信していたアイドルがちょっと根が暗い知り合いの女の子で…」
ちょっと？あ、いや、その事は今はいいや。
「いや別に幻滅なんてしてねぇよ」
「……嘘、本当は『うわぁ、須黒がりっこちゃんかぁ…』って思ってるでしょ」
顔を真っ赤にして今にも泣きだしそうだし、髪の毛の間から怒りと悲しみの光が俺を見ていた。うん、凄むと普通に怖い女の子だな。
「そんな事思ってねぇ、逆によかったと思ってるよ」
「……わからない。なんでそう思うの？」

「そりゃ～……」
ここはきっと重要な局面だ。そうに違いない。変なこと言ったり茶化したりしたらきっと須黒の目から呪いビーム的なものが出てきて後日俺は変死体となって見つかる事だろう。そして俺は吸血鬼の幽霊として新たな物語の主人公になるに違いない。絶対に生き残らなくてはいけないのだ。

しかし、何か気の利く言葉は思いつかなかった。

じゃあどうすればいいのか…答えは簡単だ。ずばり、話をすりかえるのだ。突拍子もなくいきなり別の話に変えるのではなくゆっくりと変えねばならない。あわよくば途中でいい言葉を思いついてこの難局を乗り切る事が出来るかもしれない。
「まず、第一に…」
「第一に…何？」
「須黒が俺に何故、自分がりっこちゃんであることを打ち明けたのか…それを教えてくれ」
「それは…」
よし、これで十秒ぐらい稼げるはずだ。
「…だって、義人君には一度みられちゃってるし」
「みられた？」
「……本当に気が付いてないの？」
「ああ、俺は須黒がりっこちゃんに変身する場面なんて見たことないぞ？それでこの秘密を知られたくなければ～とかも出来なかったし」
「えっと、ほら、コンサートの日に玉宮先生と私が話しているところを見たでしょ？」
「ん、ああ、そういやそうか」

つまり俺はあの時に須黒がりっこちゃんであることを知っていれば須黒に対して絶対的な力を有していたのである。
「…そのあと義人君に話をしたんだけどなんだか勘違いしてるみたいだったし、気が付いてなかったようだから…なんだか無性にイライラしちゃってばらしたくなったの」
「へぇ、それが理由なのか。でもよ、俺に言ったらその秘密をばらされるとか思わなかったのか？」
ちなみに、俺が緑川等の秘密を握った場合は脅迫するに決まっている。
「だって、私と友達になった時に『友達が少ない』って言ってたでしょ？」
「あ～どうだったかな」
記憶にございません。俺の行動をもう一度転校してきたところからやり直したいもんだが、面倒だからパスだ。そんな小さな出来事はどうでもいい。
しかし、俺にとって小さい事でも須黒にとってはとても重要な事のようだった。
「…そっか、もう覚えてないんだ…」
見るからに落胆したような表情だった。
「あ、えーっとだな、放課後は大体須黒と一緒だったし友達は今でも少ないし…色々あってすぐに忘れるような性格なんだよ」
「…そうなの？」
「そうそう、須黒だって忘れることあるだろ」
「私は……忘れないもん」
「ないない、それはない。じゃあ俺がりっこちゃんのコンサートに誘った時の言葉は何だよ」
「…軽薄そうな笑みで『この前緑川から交換条件でもらったんだよ。二枚あるから一緒にいかないか』って言ってきた。てっきり他の女子に頼んで駄目だったから私に回ってきたのかなって調べたけど、私が一番最初で最後だったのが印象深くて残ってる」

「そ、そうか…」
「本当は…行きたかったんだよ？」
何だろう、すごく悪い事をしてしまった気がする。しかし、本当に一字一句間違いなくそう言ったんだろうか？確認しなければいけない俺でもよくわからないな。あの時は確かちょっとエッチな本を読んでいた気もする。
「まぁ～…須黒の記憶力がいいのはよくわかったよ。うん、俺が悪かったから許してくれ」
えへへと笑ってごまかしてみた。
「駄目」
これが通じるのはすっごく可愛い女の子が使った時か、子供が使った時ぐらいだろう。これで何とかなるって思っていたから後が無い、一つしかやってないが万策尽きた。
「…私の事、どれくらいわかる？」
「わかるって…どういう事だよ」
「好きな食べ物とか、色とか、そんな簡単な事」
「いや、あんまり一緒に弁当とか食べたことないし、色はどうせ黒だろうし…」
「私は義人君の好き食べ物とか嫌いな物、嘘ついた時の仕草とかわかる」
「ほぇ～そんなことまでわかるのかよ」
「うん、それに……たまに私の事を義人君が怖い顔で見てるってことも知ってるよ」
怖い顔……つまりは俺の腹が減っている頃だろう。輸血パックみたいなもの（献血するときにみるだろう血を入れる為の奴ね）を定期的に飲んでるからな。あれはまずいがとりあえず飢えをしのぐ事が出来るからいいもんだ。まぁ、同じ部活だから隙をついて噛みつこうとか思ったことも何度かはある、あるけど…やったことはない。
「義人君なんでしょ？」
「え？」

「義人君が……吸血事件の犯人なんでしょ？」
前みたいに無表情。それが怖かった。
「でも、私は…それでも構わない」
「いや、ちょっと待ってくれよ。俺は犯人じゃねぇよ」
「ううん、いいんだ。言い訳しなくても…義人君が犯人でも、いい。私が義人君にりっこだったって事を打ち明けたのはちょっと期待してたからなんだよ」
「期待だって？」
「うん、とても大切な事を言ったんだから義人君も秘密にしている事を教えてくれるかもしれないって……でも、教えてくれなかったよね」
そりゃそうだ。言ったところで信じてもらえないだろうからな。
「あのな、須黒…」
「用事があるから、またね」
「あ、須黒っ」
追いかけなくちゃいけないんだけど……何だか追いかけたら叫び声をあげて大変な目に会いそうだった。話をうまくすりかえられたようだったけど、さらに面倒なことになった気もする。

第二十七話：ち：吸血鬼、準備する

第二十七話

吸血鬼を仕留める為にはどうすればいいのか…。そりゃ何度も何度もめった切りにしていれば多分死ぬんだろうが出来れば手っ取り早い奴がいいんだろうな。これがまぁ、確立されていないと言ったほうがいいだろう。もちろん、昼間のうちに太陽の光を直接当てさせればいいわけなんだが…知っての通り、日焼け止めなどでそれらが通用しない吸血鬼もいるわけだ。銀の弾丸が通用すればいいんだけど、日本じゃ銃はちょっと手に入れづらいからな。

やっぱり、俺が吸血鬼を見つけた場合は説得するしか方法が無いんだろうな。

放課後、校門前でぼーっと千華を待っていたら一人の老人が目に移った。校庭側から場外ホームランのボールが飛んできていた。一直線に爺さんを狙っており、偶然にしてはあまりにも出来すぎているような角度で後頭部に当たりそうになった。

「え」

下手したら爺さんを昇天させたかもしれない白球は誰もいないコンクリに当たってちょっと撥ねただけだった。爺さんの姿は数メートル程移動していた。実際、目にもとまらぬ速さで移動したのは確認できたんだけど……あんなの人間が出来ることじゃあない。

「……血の匂いもするなぁ」

何かの薬で血のにおいを隠しているようで、その不快なにおいは胸糞の悪くなるようなものだった。

「ごめーん、待った？」

久しぶりにシリアス満々の顔して考えていたところに元気よく千華がやってきた。

「ん、いや…」

「どしたの？元気ないけど」

「吸血鬼っぽい人物を見つけたんだよ」
「へぇ～じゃあその人が犯人かな？」
「どうだろうな…確証が無いって言うか……人間にまぎれて生活しているだけの普通の吸血鬼かもしれないし…」
俺がそう言うと千華は驚いたような顔をしていた。
「どうかしたのか」
「あのさぁ、もしかして…義人君ってばこの町に住んでいる吸血鬼のデータとか持ってないの？」
「持ってねぇよ」
「じゃあ誰が犯人かってわからないんじゃないの？容疑者っぽい吸血鬼がいたら成敗するつもりだったとか？」
その言葉に俺は当然首を振る。
「俺がここに派遣されたっていう事は現地にＮＫＫに所属している吸血鬼がいないってことだろうから住んでいる人数は零だろうよ」
「じゃあさっき吸血鬼かもしれないって言った人は後から引っ越してきたってことなのかなぁ？」
「うーん…一度確認したほうがよさそうだな。というわけで、俺は帰るよ」
「あ、あたしも義人君の家に行くよ」
「なんで」
「だってそりゃあ相棒だもん」
えへへーって笑っているとは実に余裕だ。さっきの老人が吸血鬼なら……勝てる見込みはない。
無碍に追いかけす事も出来ないのでいつものように二人で話しながら帰った。いつもと違うのは直接俺の部屋に千華がやってきた事である。
「で、何か特別な通信機みたいなもので情報を本部から受け取るの？」
「そんな大層なものはねぇよ。携帯で事足りる」
「なーんだ…がっかり」

「そう言われてもな…」
千華にはコーヒーを出して親父に電話することにした。
「あ～もしもし親父？」
『どうした？』
「いや、今俺の住んでいるところ……っていうか、最近は事件も起こってないんだけどこの辺りに吸血鬼とか住んでたっけ？」
『ちょっと待ってろ……』
コーヒーをあっという間に飲み干した千華が俺の方を見ていた。何かを期待しているようだ。しかし、それが何かはわからない。
「ねぇねぇ、義人君が所属している組織のトップって義人君のお父さんなんだよね？」
「ああ、そうだよ」
「じゃあ義人君ってボンボンって事だよねぇ」
「いや、そうでもないなぁ……そこらの家と変わらねぇっていうか中流程度じゃねぇかとおもう」
「ふーん」
『あったぞ…えーと、今のところその地域に吸血鬼はいない。一昨日のデータが出てるからな。お前以外はＮＫＫに所属している吸血鬼はいないって事になる』
「わかった、じゃあ今後も探してみる」
『ああ、義人。ちょっと待ちなさい』
珍しく親父から引きとめられた。
「ん、何だよ？」
『そこにいる女の子と代わりなさい』
とりあえず女の子と知り合いになろうとするのが俺の親父だ。別に直接手を出すわけじゃあない……人は一人じゃ生きられないって言うそれと同じで誰かと関係している。言い方は悪いけど不細工の知り合いが全員不細工と言うわけではない為にその中に好みの血を持つ人間が含まれている可能性があるからな。
俺と電話を代わった千華は何やらしきりに頷いていた。徐々に目

をキラキラさせているようで……途中からはちょっと照れているようだった。
電話を切って俺に手渡す千華に尋ねてみる。
「千華に何話してたんだ？」
「教えない、秘密の話だよ」
「秘密って…」
「ともかく、義人君のお父さんがいい人みたいでよかったよ」
「見た目はまるでフランケンシュタインの怪物みたいだけどな」
「えー、見た目なんて関係ないよ。そうなったら義人君だって吸血鬼っぽくないし…」
「……」
どうせ千華の頭の中には黒地で裏地が赤いマントの線の細い奴がワイングラス片手に笑っているんだろうけど、日本の吸血鬼はそんなもんじゃねぇよ。
まぁ、イメージするのは難しいな。所詮イメージに準じるような格好をしないとなかなか吸血鬼って認めてもらえないところがあるからな。
「…俺も普段からトマトジュースをがぶのみして吸血鬼のイメージ定着を狙おうかな」
「え？義人君って正体隠しているんじゃなかったっけ？」
「そうだったな」
「そうだよね、今頃正体ばれていたら正義の味方に即スカウトされていたよ」
「どっちかというと吸血鬼は悪の組織っぽいイメージがあるけどな……ま、いいよ」
用事が無いのなら帰ってくれ……とは言えないので無難なところでテレビをつけておいた。
「ちょっと、トイレ行って来る」
「別に宣言しなくてもいいよ。それにデリカシーが無いから『お花を摘みに行って参ります』とか言えばいいと思う」

「あー、はいはい、大きい方を力みまくってきますわ」
トイレに入って辺りを見渡す。なんだか誰かに見られている感じがしたんだけど……男一人の住居に用事のある奴なんていないだろうな。
しっかし、人間が腹筋を鍛える理由って言うのはこれだけだって最近思うようになって来たぜ。腹筋とか普段の生活でトイレぐらいしか使わないからな。腕の力は重い物をもつとき（例：箸）に使うし、足の筋力は食い逃げに使用するって言う人もいるだろう。後は坂道ダッシュとかか。
用事を済ませて…ああ、もちろん、ゆっくりしたから大丈夫だ。あんまり力を入れすぎると切れるとかなんとか親父が言っていたからな。手を洗ってリビングへと戻るとテーブルの上に肌色多めの本が、俺の部屋にきっちり隠されていた本が、蛍光灯の光に照らされていた。
「これ、何？」
「これ、何って…」
いや、まさか家探しされるなんて思ってなかった（思っていたから隠していたんだが甘かったな）わけではないんだけど……なんでエロ本を引っ張り出されてきたんでしょうか。
「この前もこーんな本を読んでたんだよね」
「いや、あれはまだ読んでないぞ。読む前に千華に処分されちゃったし」
「本っ当、義人君ってばこの町に何しに来たの？エッチな本を見る為に来たの？」
「ち、違うぞ。ちゃんと吸血鬼を捕らえるか説得するかのどちらかをする為だ」
「じゃあ要らないよね？」
「いや、それは…」
「しかも、『経費分、吸血鬼に関する本』って書いてるじゃない」
「……」

これはいいわけ出来ないな。報告するときは『件の吸血鬼が狙っている女性の参考書』だと言おうと考えていたりする。もちろん、その時には殆ど廃棄するつもりだった。
「あたしが処分しておくから」
「う、うう…お願いします」
「はい、じゃあこれ焼却する本の代わり」
そういって手渡されたのは（というか、本は燃やすつもりなのね）二つ折りにされた何かだった。それを二つ折りから戻すと胸につけるあれだった。
「ぶ、ブラジャーかよっ」
「そ、そうだよ。あたしのだから存分に使っていいよ」
「使っていいって……」
嬉しいような、ってそういう問題じゃない。
「俺にはこんな変な趣味はねぇよっ。ほ、ほら、返す」
若干後ろ髪を引かれるような感じがしないでもない、しかし、こんな趣味があったとか学校に広まったら大変なことになる。
「え、ええ？だって緑川君が『義人は変態的な趣味だからね、この前も女子生徒の下着を盗んでいたよ』って言ってたよ」
「あいつの言う事は嘘っぱちだ。適当に言ったんだよ」
「でも、緑川君のアドバイスでこの本の隠し場所わかったんだよ？」
「いや、それは……関係ないから」
意外と大きかった気がするブラ……というか、渡したと言う事は今つけてないんじゃ……いやいや、変なことは考えちゃいけない。
「ん？」
ふと、窓の外を見ると校門前にいた爺が張り付いていた。その目は獲物を求めるような目で視線の先にいるのは千華。
老人は舌なめずりをして満足そうに千華、そして俺を眺めてから姿を消した。
「ど、どうしたの？そんなに怖い目で外を睨んで……」
「千華、お前の家に俺を一日でいいから泊めてくれないか？」

「え、い、いきなりどうしたの？別にいいけどさ」
「そっか」
「じゃあいつ泊まりに来るの？」
「今日だ」
「え」
「大丈夫、夕飯とかはこっちでちゃんと準備するから」
さっきトイレでの違和感は爺に見られていたからだろうか……ともかく、不審者を久しぶりに見つけたのだからそいつが千華を襲う可能性もあるだろう。
今回の事件を起こした相手であると言う事を祈りつつ、そして俺が問題なく相手を説得、または仕留められるよう準備をすることにした。

第二十七話：ち：吸血鬼、準備する（後書き）

奇数話ラスト（プロトタイプ）：「血を飲むためのパックが不注意で破れてしまう。血を手に入れるため千華とともに病院へと忍びこむとそこには別の吸血鬼が潜んでいた…義人はそれを追うが、血を飲んでいなためなのか、はたまた弱いからか吸血鬼に逆にやられ絶体絶命のピンチに陥る。一撃から救ったのは千華で、彼女は致命傷を負い、自分の血を飲むように義人に伝える。義人は血を飲み、吸血鬼を見事打ち倒すのであった。徐々に冷たくなっていく千華をどうすればいいのかわからない義人は彼女を吸血鬼にすべきかどうか悩むのだった。」といった感じですね。うん、なんでぐだぐだな方になってしまったのかわかりませんが次回で奇数編終わりですかね。

第二十八話：み：吸血鬼

第二十八話

現代によみがえった吸血鬼を追い詰めた博士。彼は最終的に吸血鬼の血液から作り出された薬を吸血鬼に打ち込み、息の根を止めることに成功したのだった。

「くくく、これで全世界の吸血鬼を根絶やしにする事が可能なのだな」

顔をにやつかせ、液状になった元吸血鬼を足蹴にして博士は何処かへ消えて行った。

「んで、先生はこの薬とやらを作るつもりなんですか？」

須黒のいない部活動。当然、部員は二人中一人の俺だけだ。あとは先生が珍しくいる。どうも、アジトを突き止めたらしい。

「そうよ」

「そうよって、先生の持ってきた本は創作物ですよ。うまく作れるってわけじゃ…それに、出来たとしても実際に効くかどうかどうやって試すんですか」

「簡単よ。大仁君に打ち込めばすぐに結果はわかるわ。試作段階の物から徐々に打ち込んで行って一番効果が高かったものを改良、そして実戦に投入するから問題はないわ」

「……」

げに恐ろしきかな、この人は俺の事を実験台とマジで思っているようだ。

「そんな渋い顔しなくても大丈夫よ。これは冗談だから…本みたいに液状になったりしないから」

「ほっ…じゃあどうやって効果を確かめるんですか？」

「あら、そんなに死にたいの？」
「死にたくはないですけど吸血鬼を倒せないなら意味がないかなって思っただけです」
　先生が準備している機械は注射器などだ。後は試験管とかそこら辺の理科室…主に生物室にあるようなものばかりである。異色なものとしたら弾丸と拳銃だった。
「詳しくは教えられないけど、大仁君の血から数種類の薬を既に作ってるわ」
「え？もうあるんですか…」
「ええ、試してみたいって言うのなら撃ってあげるけど？」
　右手で銃の形を作って俺の頭を撃ち抜くような仕草をする。本当、この人を相手にしなくてよかったと思ってる。
「遠慮しておきます……出来ているのならなんで道具の準備しているんですか」
「大仁君から血を採ってそれに薬を使うのよ」
「血に何か異変が起こったら成功って事ですね」
「いいや、失敗よ」
「え？」
「この薬がそれこそ吸血鬼の全てを滅ぼせるというのなら頭のおかしくなった連中が絶対に欲しがるわ。もし、出回っちゃったら全世界の吸血鬼はあっという間に死滅するもの」
　まぁ、そうだろうなぁ。吸血鬼を倒すために作ったものだ。吸血鬼を滅ぼしたい連中にとっては喉から手が出るほど必要なものだろう。
「でもね、安心していいわ」
「え？なんでですか？これって相当やばい代物なんでしょ？」
「一部の吸血鬼にとってはね……これは人間が恐怖を感じた時の血をすすった者だけに死を与えるものなのよ」
「つまり…？」
「つまり、良い、悪い吸血鬼の定義なんて曖昧なんだけど今回の吸

血鬼は人を襲って血を吸っている。もちろん、血を吸うときに人間が悦に入るような分泌液を出していたりするけど多少なりとも吸っているでしょうから効果が期待できるわ。もちろん、あなたがこれまで生きてきた中で一度でも恐怖におののいた人間から血を吸っていると言うのなら……あなたの血は一瞬にして蒸発するわ」

恐ろしい話である。

「…多分、大丈夫です。生まれて十七年ぐらい経ってますけど人から直接血を吸った回数はちゃんと覚えていますし、襲った事はありませんから」

「そう、意外と若いのね」

「先生はどうなんですか？」

「……まず、撃ちこまれたら瞬時にミイラになるでしょうね」

そうとう悪い事をして生きてきたのだろう……しょうがない、長く生き過ぎた吸血鬼は精神のどこかがおかしくなってしまうとか聞いた事があるからな。

「あ、何か失礼な事を考えたわね？言っておくけど、たとえ私が人間だったとしても人を傷つけて悦ぶような性格だと思うわよ」

「先生、仮にも生徒ですからそういうことは言わないで下さい」

「……そうね」

先生は俺から採血した後、さっさと液体を垂らしていた。垂らされても血は一切変化が無い。

「ほら、ね？」

「よ、よかった……」

「で、これが私の血となると……」

シャーレの上に自分の指から血を流しこむ。そして、液体を注ぐと一瞬にして蒸発し、そこに残ったのはかすかな血痕だけだった。

「お、恐ろしい代物ですね」

「そうね……今回の相手はこうなる事を望んでいるのよ」

「え？」

いまいち意味がわからなかった。説明する気もないようで道具を

片づけた後、先生は携帯電話を差し出した。
「今晩、七時前に校門前に集合」
「はぁ…で、この携帯電話は何ですか」
「今から須黒さんに電話をかけるのよ」
「何故ですか」
「立ち会ってもらう為。約束したからよ」
「約束って…」
電話帳に登録されていた須黒の名前を押す。するとすぐにコール音に変わった。
「女の子同士の秘密よ、男の子には教えないわ」
はっ、女の子だってさ。
そんな事を思った俺の耳、すぐ隣を何かすごく危ないものが通過していった。
「試し撃ちよ」
「……そ、そんな物騒なもんを撃たないで下さいよっ。当たったらどうするんですかっ」
「当たっても消えはしないんだからいいじゃない」
よかぁない。死ななかったとしても痛い思いをするのは間違いない。
『もしもし、先生？』
「あー、俺だ。先生からの伝言で…何時でしたっけ」
「今晩の七時よ」
「今晩の七時、学校前に集合してくれだってさ」
『……わかった』
俺にそれだけ言うと切ろうとした雰囲気が伝わってくる。何か言ったほうがよさそうだったのでいざ口にしようとしたところで電話を取り上げられた。
「もしもし、えっと……さ、帰っていいわよ」
「え」
「今日の活動はこれでおしまい。解散よ。今度は身体に撃ちこんで

ほしいっていうのなら残っていてもいいけどね」
そんな事を言われたら帰らなくてはいけない。
「失礼しまーす」
先生が須黒と何を話そうといしているのか気になる……気になるが、黙って帰らないと風穴を開けられる可能性が高いのでやめておいた。
ま、後で須黒に聞けばいいだけだからな。ところで、俺ってこの事件が終わったらどうなるんだろうな。この町にこのまま居るのか、それとも前の町に戻るのか……どっちなんだろうか。

第二十九話：ち：終わり

第二十九話

過去一度、血を一切吸わなかった吸血鬼がいたらしい。それって吸血鬼なのか？と言われればなんとも言えないもんだけど身体調査によるとちゃんとした吸血鬼だったそうだ。血を吸わない吸血鬼がどうなるか…答えは簡単、本来の吸血鬼の寿命よりはるかに劣る年齢で衰弱、死んでしまう。ただまぁ、吸血鬼の寿命なんて本人が生きようと言う意思があれば何とかなりそうなもんだけどな（長い年月の間で心変わりし、死を望む吸血鬼もいるそうだ）、その吸血鬼は八十四歳で天に召された。

俺のお泊まりを青木家の面々は喜んでくれた。特に、妹の由香ちゃんが一番喜んでいるようにも見えた。

「あ、あの、今日してくれるんですよね」

以前こんな事を言われたら千華からどんな目にあわされているか想像した自分がいたことだろう。

「由香、駄目よ。義人君はそんなことしないんだから」

「え…でも吸血鬼は仲間を増やしたがっているって義人さんとお友達の老吸血鬼に言われたもん」

「……由香ちゃん、詳しい事を教えてくれないかな？」

俺の推測が正しければあの老人から言われたのだろう。だとしたら、やはりあの吸血鬼を討たねばならない。吸血鬼の事は普通の人間に教えるべきものじゃないのだ。

その理由の一つに迫害の歴史がある。みんながみんな吸血鬼を滅ぼしてしまえなんて思わないだろうが、少しの期間だけそう言った事があったらしい。ＮＫＫの古株は『あの頃は怖かったよ、だって十

字架逆さまに担いで追っかけられたんだからな』と語っている。
「その老人は他に何を言っていたのかな」
「うーん、吸血鬼になったらすごく楽しい人生が待っているんだって言われました」
「そんなバカな…」
「ああ、それならあたしもそう思うなぁ」
「千華まで何をバカな事を言ってるんだよ。人間を吸血鬼にするのは色々と面倒なんだぞ。由香ちゃんがさらにやる気になってるじゃないか」
　妹の教育によろしくないだろうに。
「だって、義人君とか空飛べるし、すごく強いしこれなら正義の味方になれるんだもん」
「確かに、空は飛べるし、すっごく強くなれる。でも、日光が危険なものになるし、日中ねむくなったり面倒なことになるんだぜ？」
「でも、義人君は日光平気じゃん」
「そりゃまぁ、日焼け止めを塗っているからな」
「日中も眠ってないじゃん」
「それは慣れだな」
「じゃあ慣れれば……」
　由香ちゃんが俺に首筋を見せるが俺は首を振った。
「そうもうまくいかないんだよ。吸血鬼になった時点から慣れないといけない。慣れた俺だって一カ月に一回ぐらいは昼間に猛烈に眠くなってその場で寝ちゃうぐらいだからな……」
「でも、私を吸血鬼にしたら義人さんが……世話をしてくれるんでしょう？」
　そう、それが一番面倒な事なんだよ。人間を吸血鬼にすると吸血鬼が人間の世話をしなくてはいけないのだ。以前にも言った書類等の世話から規則事項、吸血鬼になってから何年の間は新たに吸血鬼にしてはいけないなどなど…自分の世話すらまともに見る事の出来ない人間が犬を飼ったらどうなるか想像はつくだろう。

「俺は嫌だね。由香ちゃんは人間のままの方がいいと思うぜ…」
「……ぶぅ」
「膨れても駄目だ」
不満そうに俺の方を見る由香ちゃん。面倒みるのが苦手な俺は絶対に人間を吸血鬼にしないだろうな。
「じゃああたしなら吸血鬼にしてくれるの？」
突如として飛んできた横やり。
「は？」
「だ～か～ら、あたしなら吸血鬼にしてくれるの？」
「なんで？まぁ、千華の場合は『空を飛びたい』とか『正義の味方になりたい』とかそんなのばっかりだろ？」
「まぁ、そうだけどさ、この前の学校事件で義人君の力になれたらなぁって思ったんだよ。すっごくかっこよかったもん」
「……はぁ」
「あの事件、その老吸血鬼の人が起こしたって言ってましたよっ」
「え、本当かい？」
由香ちゃんはこっくり頷いた。
「うん、手引きしたのは自分だって。獲物を横取りされたのが悔しかったから滅茶苦茶にしようとしたって言ってました。私が聞いたのはこれで全部です」
「獲物……？」
俺がこの町にやってきて他の吸血鬼の獲物を奪い取った事はない。大体支給された血で我慢していたからなぁ。
横から俺の事をジト目で見てくる人物がいた。
「な、何だよ」
「義人君、この町の吸血鬼を捕まえるとかいいながら女の子襲ってたんだ？」
「お、襲ってねぇよ。そりゃ俺だってちゃんと活きのいい血を飲みたいけど我慢してパックの奴を飲んでいたんだからな」
「へぇ～って、冗談だよ。多分、あたしと最初に会った時の吸血鬼

がそのおじいさんだったんだよ」
「……あ、そうか」
なるほど、吸血鬼が吸血鬼の邪魔をしたと言うのなら…そして、放課後一緒に登下校しているのなら獲物を盗られたと思うだろうな。
「でも、今更あたしを狙ってくるなんてどうしたんだろ」
「……古い考えの吸血鬼だろうからな。どうしても血が欲しかったんだろ」
「え、あたしの血ってそんなにおいしいのかな？ああ、若いからか…うんうん、そう考えるとちょっとだけ嬉しいな」
俺としては千華の血なんて飲んだら熱血フルパワーになって頭がおかしくなるんじゃないかと思う。青虫だってキャベツの葉を食べずに人参食べていれば色が変わるんだからそうなるだろうに……まぁ、吸血鬼がどうなるかは知らないけどな。
「ともかく、今日はそろそろ寝てくれ。俺は屋根にいるから」
「え？一緒に寝ないの？」
「寝るわけないだろ」
しっかりと準備された三つの布団を指差される。
「寝ようよ」
「じゃ、行って来る」
寝ようよーという声を無視して俺はさっさと屋根まで登った。ここなら吸血鬼が来ればすぐにでもわかる。
しかし、屋根の上には既に先客がいた。こんな時間帯に人さまの家の屋根に昇っているような奴に碌な奴はいない。
「……」
「ほっほっほ、若い頃の自分を見ているようじゃ」
月明かりに鋭い犬歯がきらりと光る。芸能人は歯が命ってＣＭそういえば前にあったなぁ…。相手が吸血鬼なのは間違いないだろうから俺はさっそく説得コマンドを選んだ。
「質問があります」
「わしがお前さんの話に付き合ってやるのは五分間だけじゃぞ」

勝手な爺さんだ。ともかく、全く素性のわからない相手だから下手に断ったりしたら面倒だ。説得できるものも出来なくなっちまう。
「あなたがこの町の吸血鬼事件の犯人ですか？」
「そうじゃ…と、言いたいところだがこの町で事件を起こしていた吸血鬼は別の吸血鬼によって滅ぼされたわい」
「……本当ですか？」
「本当じゃ。この近くの高校、そこで息の根を止められたどころか血痕しか残らんほどに滅茶苦茶にされたんじゃよ」
一見すると目の前の老人が嘘をついているようには見えなかった。ただまぁ、やっぱり怪しいので心の奥底から信用はしていない。
「じゃ、じゃああなたは何者ですか」
「血に狂って事件を起こしまくった吸血鬼の相棒じゃよ。わしの寿命ももう少ない……ばあさんをやった吸血鬼に仕返しをしたくて関係のないお前さんを襲おうと考えておったんじゃ」
とんでもねぇ爺だ。
「そろそろ時間じゃな」
「ちょ、ちょっと待ってください」
「そこに剣がある」
爺さんが指差す先には二振りの銀の剣が屋根に突き刺さっていた。月明かりを受け、眩く輝いている。
剣を握り、俺に切っ先を向ける。子供の頃はちゃんばらで遊んでいたもんだが……それはあくまでおもちゃであって本物ではない。
「わしという吸血鬼をその身に恐怖で刻んでやろう……」
先ほどまでの優しそうな爺さんはどこへやら……狂気に満ちた瞳はしっかりと俺を捉えて離さない。
「ま、待ってくださいってば。俺はあなたと争う気なんて…」
「別にわしはそれでも構わんよ。吸血鬼にもできなかった人間の小娘なんぞにもはや用もない。それを決めるのはお前さん次第じゃ」
「……」
別に手元にいなくたって吸血鬼がその気になれば屋根を貫いて下

で寝ている人間を一発で昇天させることぐらい簡単なことである。
ともかく、爺さんの都合で由香ちゃんの事を吸血鬼にしたかったらしい。
「…なんで由香ちゃんの事を吸血鬼にしたかったんですか」
「簡単じゃよ。さっきも言った通り、わしの寿命はもうないと言ったほうがいい…わしという存在を覚えておいてもらう為の伴侶も吸血鬼に殺され、このままではわしはこの世界から存在しなくなってしまう」
死んだら……そうなるんだろうけどな。狂気に満ちた者が何を言っても理解できないし、理解しようとも思わない。
「お前さんにはわからんじゃろう。長く生き過ぎた、考え方の違いかもしれん」
呆然と立ち尽くす俺に爺さんは一瞬だけ優しい笑みを見せた。
瞬きを終えた俺の瞳に映るのは狂気に満ちた爺さんだった。彼は剣を構え、迷うことなく一歩踏み出してくる。俺も慌てて剣を引っこ抜くととりあえず構えてみた。一応、心得はあるんだけどな。
互いの剣が触れるか、触れないかの時に爺さんは大きく体を動かし、へたれな俺は後ずさり、体勢を勝手に崩した。

やられる……

そんな言葉が真っ先に頭に浮かぶ。次に浮かんでくる言葉は何故だか知らないが千華に対する謝罪の言葉だった。
目をつぶることなく、せめて切りかかってくる相手の顔を見続けようとしっかりと目を開けていた。老人の剣は俺のすぐわきへとそれ、屋根を貫いて爺さんはそこへと倒れ込む。
「……」
爺さんの体は全く動かず、俺も動けなかった。

俺は手に持っていた剣をへし折って捨てた。再び爺さんの方を見るとさっきまであった身体はどこにもなく、服だけが残っていた。
「まさか素っ裸になって逃げたとか……いや、ないか」
吸血鬼が寿命を迎えたらどうなるのか、俺はよく知らない。爺さんが死んでしまったのか、それともどこかへ行ってしまったのか定かではないけどこのまま屋根の上にいると言うのも変な話だろう。
事実上、これで羽津吸血鬼事件は終わったと言う事になる。

いまいち消化不良が否めない事件が終わり、二学期になった。
「というわけで、羽津吸血鬼事件は関係していた吸血鬼全てが死亡したと言う結果になりましたとさ」
「そうか、ご苦労だったな」
俺は二学期初日から学校をさぼってこうやってＮＫＫ理事である親父に報告していたりする。ここ一週間、ひっきりなしにかかってくる千華からの電話を全部無視。俺は事件が終わったと言う事を手紙で送っただけだ。そして、夜逃げに近い引っ越しをしてこっちに帰ってきたのだ。
「アパートのおばちゃんにはちゃんと挨拶してきたんだろうな」
「そりゃまぁしたけどさ」
「そうか、後はお前の問題だからな。別にあちらの高校でもよかったんだぞ」
まるでフランケンシュタインの怪物みたいな親父は顎を撫でている。
「いや、俺もあっちでよかったんだけどさ、色々とあるんだよ」
「色々って何だ？女絡みか」
「違う」
「ともかく、電話がかかってきているのだからちゃんと出てあげる

のが紳士のたしなみだぞ」
　にやにやしながらこちらの方を見てきている。何か企んでいるんだろうか。
「電話が終わったらまたこっちに来てくれ。新しい事件が起こったからな」
「わかったよ」
　それだけ言って退室することにした。親父の言うとおりそろそろ電話に出たほうがいいかもしれない。
「……はぁ」
　怒られるだろうなぁ、絶対に。ともかく、出てちゃんと謝ろう。
　かかってこないのならそれが一番いい事なのだ。しかし、結局はかかってきた。
「……もしもし？」
『もしもしじゃないよっ』
　鼓膜をつんざくような声が襲ってくる。耳をふさいで逃げ出したくなった。あの青空の向こうへ両手を広げて飛んでいきたい……。
『なんで電話無視するの？』
「いやー、ほら、説明するのが面倒って言うか…それに由香ちゃんから吸血鬼にしてほしいとか言われたらかなわないからな」
『じゃあ、なんで転校してるの？いきなり二学期始まって転校しましたとかクラスのみんながポカーンとしてたよ』
　今世紀最大のポカーンだよ、千華は吐き捨てるようにそう言っていたのだが、俺にはいまいちわからない。
「いや、もう無理だって。俺もＮＫＫの一員だからな。悲しい事だけど、また新しい事件があったんだよ。ほら、俺って正義の味方的な事やってるからしょうがないんだよ」
　苦し紛れの嘘だったけど、千華に対しては絶対的な効果があるはずだ。
『そっか…』
　電話の向こうからは納得していないけど諦めたような声が漏れて

くる。少しだけ心がいたんだけどしょうがない。
『じゃあ、手伝うよ』
「え？」
『あたし、義人君の相棒だよっ。だからあたしも手伝うよ』
これに対してどう切り返したらいいのかわからなかった。そんな時、俺の手から携帯電話を取り上げる人物が約一名、いた。
「あー、もしもし、千華ちゃん。実はまた新たにそっちに吸血鬼が現れてね。ああ、そうだ。またそっちの高校に転校することになるから義人の事をよろしく頼むよ」
「お、親父っ」
片目をつぶって俺を笑っている。似合わないんだよっ。
「ああ、そうだ。じゃあ、よろしく頼むよ」
勝手に電話を切ってしまった。
「な、何してくれてるんだよっ」
「これは命令だ。今日中に支度をして、いや、後日荷物は送ってやろう。すぐに飛んで行け。今回は協力者が既にいるからな。こちらで下宿先を決めている」
「もしかして…」
「そうだ」

約一時間後、俺は千華に会って頬を思いっきりぶたれて抱きしめられた。

〜終〜

第二十九話：ち：終わり（後書き）

千華編終了です。短い間でしたが読んでくれた方々ありがとうございました。

第三十話：み：弾丸の贈り物

第三十話

偉人の言葉は選集のような物を読むだけで偉くなったような気がする。誰だったか度忘れしてしまったけど覚えている言葉がある。貴方の人生はあなたの思い通りに変える事が出来る。何故なら貴方自身によってデザインされるのが貴方の人生だ。ゲーテか、うちの親父か、マーフィーの誰かだったと思う。

集合時間は七時ということで準備も終えて学校へと向かう。対吸血鬼用に弾丸を作りだし、須黒に対して『見届ける約束』という言葉を出してきたのだ。時間に遅れるのはまずいだろう。飛んでいくか、徒歩で行くか悩んだ結果として徒歩で行くことにした。下手な動きを悟られてはいけないと思ったからだ。

「今日のフライトもいい感じだったわ」

集合時間は七時との約束だったのに須黒が来たのは七時半、先生にいたっては八時ぎりぎり前だった。しかも飛んで来やがった。

先生の姿は黒いコートの下にライダースーツのような物を着用している。左胸辺りにはナイフまで仕込まれているし、内またにもホルスターが付けられている。今のご時世、警察が見たらどう思うだろうか。

「飛んでくるのはまずいんじゃないんですか？これから吸血鬼と対峙するんでしょ」

俺の質問の回答はデコピンだった。

「まだ未成年には刺激が強すぎるわ。こういうのは大人がやるもんよ。見た目若くて頼りがいのある大人が……ね」

「先生、実年齢いくつですか？」

避けられたのは僥倖だろう。もしも避けられなかったら頭に指がめり込んでいたに違いない。
「吸血鬼の件が終わったって言うのならなんで俺らは呼び出されたんですか？」
須黒と一緒にいる三十分間が何だかいつもより長く感じられた。隔たりがあると言うか、話しかけても反応してくれないし、いきなり変な歌（吸血鬼なんて滅んじゃえばいいのにな）を歌いだしたりしたし……何だか怖い。
そういえば、俺が吸血鬼だって言うのがばれてから話をしてなかったかな。
「聞いてますか？」
先生は何やら時計を見ていて俺の話は聞いていないようだ。須黒も右手に何か持っているようで（血の匂いがする）そっちの方を気にしている。
「ま、立ち話もなんだから部室に行きましょうか」
「はぁ、わかりました」
先生は須黒を掴んで部室まで飛んでいき、俺も後を追って部室へと入った。
入って、驚いた。
「あのー、玉宮菜穂子先生？」
「あら、改まってどうしたの？恋の相談事かしら？」
「いえ、荒事の……相談です」
どういった仕掛けだろう…入った瞬間に窓は全てシャッターのようなもので封鎖され、テレビでしか見た事のなかったガトリングガンの台座の部分に先生と須黒がいた。俺？俺の立ち位置はちょうど撃ちだされた銃弾が全段ヒットするような場所に呆けたように立っていたって寸法だ。
なんでこうなっているのか？これは何の真似なのかわからない……しかし、お約束のように俺は両手を上げるのだった。
「さ、隣にいっても大丈夫よ。変な動きしたらハチの巣にしてあげ

るから」
「……わかりました」
先生の指示で俺の隣に須黒がやってくる。どうでもいいけど、この状態で撃ったら須黒もハチの巣にされるんじゃないだろうか……。
「…これ」
「え？」
「飲んで」
俺に何かを手渡して須黒は拳銃を握り、俺のこめかみに押し当てた。引き金引くのは簡単だろうけど反動とか無いのだろうか？
「あのー…全く状況つかめないんですけど。なんで俺は知り合いに拳銃突きつけられてるんでしょう」
胸押し付けられているほうがいいんだけど希望って通らない世の中だからしょうがないな。
「そりゃー…あれじゃない？」
「あれ？あれって何ですか？」
「女の子がこれまでずっと秘密にしていた事を言いました～」
「はいはい」
「でも男の子はへぇ～そうなんだ…ふんふん。たったそれだけで終わりました……じゃあ撃ちましょうってなるでしょ？」
「なりませんよっ。意味がわかりませんっ」
ああ、やっぱりそう言った事が原因か。つまりこれは俺が招いた自業自得の結果なのだろうか。
俺が手に握っている物は三角フラスコ。中には真っ赤な血が入っていた。
血である。誰の血なのかこの距離ならわかる。
「これって……やっぱり須黒の血だよな？」
「うん。先生に抜いてもらった」
「ぬ、抜いてもらった？俺も一度でいいから先生から抜いてもらったって言葉をつかいた……いや、なんでもないです」
ガトリングガンのほうから準備運動を始めた音が聞こえたような

気がした。
「飲んで。飲まなかったら撃つ」
躊躇ない一言である。脅されては仕方がないので一気に飲み干すことにした。
血を飲み干した直後、胸に強い衝撃が走る。内部からではなく外部から……細い棒で遠慮なく突かれた感じに似ていたその衝撃はどうやら俺の体を貫通したようだ。後ろのシャッターを一部へこませているがわかる。それと同時に先生が一丁拳銃を握り締めてそこからかすかに煙が昇っていた。
力が抜け、俺はその場に倒れ込む。指先、つま先から徐々に麻痺していくのが手に取るようにわかった。
「せ、先生……なんで……撃ったんですか？」
俺の視界は座り込んで泣きそうな顔をしている須黒しか映っていない。
「そういう約束だったでしょう？吸血鬼は丈夫だから死ぬ時も苦労するわよ」
先生も俺の方へと近づいてきた。須黒から銃を取り上げて弾丸を抜くような仕草を見せたが……弾は入っていなかった。
「さ、意識が完全になくなる前にこの子に何か言ってあげたら？」
先生は俺の頭を足で小突く。
「……悪いなぁって思ってる。あの時ちゃんとお前に謝っておけばよかったよ」
「……ごめん、ごめんなさい……友達だって言ったのに……」
須黒は泣いているだけだった。暗いイメージの強い友人だが、泣き顔はあまり似合わない。
「…この事件が終わったら帰る予定だったんだけど須黒とちゃんと話して帰ろうって思ってた……」
もう身体で動く場所なんて胴から上ぐらいだ。
「…私達…友達……だよね？」
そう言えばこんな言葉をいつだったか図書館で言われた気がする。

徐々に瞼が重くなってきた。身体も重くてなにかしたくても出来やしない。回答を待つ須黒に頷いてやることすらできなかった。
「……義人……君？ねぇ、目を…開けてよ…なんで、なんでこんな…」
揺さぶられるけど最早どうしようもない。須黒の悲痛な声を聞くだけしかなかった。

俺にはもう、何もしてやることなんて出来ないのだ。

こうして須黒の住んでいた町での吸血鬼事件は俺が何かをするわけでもなく勝手に終わった。

十三時間後
「あれって即効性の麻酔だったんですか？」
「そうよ。対吸血鬼用の本命撃ってたら今頃消え去ってるわ」
町はずれの分かれ道……とはいっても山を越える道か国道へとつながる細道かの違いしかない。静かではなく人だって普通に歩いているし、結構車の通りも多い。
「先生は俺の意識がなくなったあとわざわざ連れ出してくれたんですよね？」

「あなたは吸血鬼だからね。それにＮＫＫの派遣調査員でもあるからあまり情報が漏れないほうがいいでしょう？」
「確かにそうですけど…」
「あんな別れ方嫌だった？」
「……」
「不服そうね。後は貴方次第よ」
「俺次第？」
「そう、貴方の人生はあなたの思い通りに変える事が出来る。何故なら貴方自身によってデザインされるのが貴方の人生だ…マーフィーって言う偉い人の言葉よ」
「わかりました」
「もう行くわ」
じゃあねと俺に手を振って先生は去って行く。
「あの、先生っ」
「何？」
「また何処かで会えますか？」
しばらく先生は考えて人差し指を上げた。
「父親に『凄い吸血鬼を見つけた。自分の手で仕留めたい』って言っておきなさい……またね」
先生は地を蹴って飛んでいってしまった。
「さて、これから俺はどうすればいいんだろうな」
道は二つある。先生が飛んで行った山を越える道、そしてこの町にやってきたときに通った国道だ。
「まだあるな」
最後に…吸血鬼事件が起こった町へ戻る道だ。
「……ああ、家の前に棺に入った状態でスタンバイしていればきっと驚いてくれるだろうな」
よし、この案で行こう。俺の足取りはすこぶる良い。今にも飛んでいきそうなぐらいだ。

数時間後、俺は警察にお世話になった。須黒も一緒に謝ってくれているが泣いている為あまり説得力に欠けているようで警察から解放されたのは一時間後だった。

そのあと須黒から『ドッキリはこれからもうしないで』と黒魔術っぽい本で叩かれたのだった。

〜終〜

第三十話：み：弾丸の贈り物（後書き）

やーっと須黒編も終わりを投稿することができました。大きな声で言えませんが放置していた事を思い出させてくれた方がいたからですね、感謝感謝。初期段階は暗い話で須黒が義人に銃を撃つという話だったのですが九割変わっています。今の段階でも読みにくいでしょうが変える前も相当読みづらかったのもありますし、暗いのもどうかと思ったのでこれでよしですね。きっとこの作品も改めて読み直したら直すべき部分がそれはもう恐ろしいほど出てきて大変な目にあうのでしょう。でもいつか直さないといけないんでしょうね……さて、最後に此処まで読んでくださった方々ありがとうございます。もう全然読んでくれている方はいないでしょうけど須黒編はこれでよかった……でしょうか？いつか時間ができたらまた吸血鬼の話を書きたいと思います。ではまたどこかでお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7582u/

お人よしな吸血鬼

2012年1月13日23時56分発行